Nov. 1894
No. 404

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百四號

要目

獨嘯鬱録　破默
一は鬱勃不平血湧く誰か同情す、他は讜儼壯重神舞ふ願は呈せん。
今天長節　隱花
克終論
對韓仁義の終を克くせよ國光の最大發揮は當に此よりすべし。
祈のかをり
嗚呼何ぞかぐはしきや
女學界今後の大勢
教界大勢論
讀西鄉南洲
悲哀の美と女性　靜淵
智慧の味ひ
嗚呼何ぞ其のあまきや
李鴻章
大廈將に壞れんとす一木何ぞ能く支へん雖然彼は人傑也深く重悼す。
糸ぐるま　空花
月を傷む　白衣
共に是れ淒慘、共に是れ悲痛、落韻飄爽、美神深哭するの調。

明治二十七年十一月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

當號目次

社說

克終論

廿七年の天長節（隱花生）

隨感

昔しの吾友は ●前生ありや無しや ●祈禱のかをり ●復活の奇跡 ●神智靈覺 ●智慧の味ひ ●父が子の爲に、犬馬となる時 ●王陽明が所謂「行」 ●躬行實踐は實物教授なり ●獨嘯鬱錄（破默）

女學

女學界今後の大勢 ●女學校の裁縫教師 ●蕩女と云へる方への答 ●悲しむべし、今の女學生 ●亭主鬱散錄（石翁）

評論

教界大勢論 ●基督教新教界 ●風雲大に來らんとす ●法外の新撰組 ●宗教は保守也、又進步也 ●一生面の診察 ●只た主動者を望む ●西鄉隆盛傳を讀む ●朝鮮懲毖錄を讀む ●日曜墓參論

爛煥

悲哀の美と女性（布川靜淵） ●糸ぐるま（空花） ●月を傷む（白衣子） ●博物館を觀るの記（無光） ●李鴻章（井上次郎） ●原忠順君を悼むの辭、並に其の略傳

片々

京濱間女學校連合 ●闘てる對マクリーン ●前橋廢娼論者氣力 ●梅花女學校の此花 ●松田みち子の書信

女學雜誌月刊に改むるの辭

明治十八年初めて女學雜誌を刊行してより、少くとも月二回、多きときは月五回の發兌を爲しぬ。凡そ現在雜誌數百種ありと雖ども、毎週の出版を爲すものは、兩手の指を屈なふに過ぎず。然るに、女學雜誌は、其齢ひ尤とも老ろくして、而も尚ほ此異數者の中に列し、毎週頻發の榮に預かり來れるは、單に顧愛の知己多くして讀者が之を棄てざるの致す所なり。當に彌よ發奮して知遇の恩に酬ふべきに、今ま俄然として最少の數にひそみ、今後、僅かに月一回の發兌となさんとするは、眞とに已むことを得ざるものあるが故なり。

編者は、近時、日本人が海外傳道に着手す可き聖機の到來したることを認識し、其の將來に於ける大國是たる可きことを確信し、之が爲めに力を盡すことの極めて必要なる所以を感覺せしかば、數ヶ月前來、大ひに同志と相謀る所ろのものありき。然るに、天運到來し、國家大ひに動き、忽然として帝師外に正義を主張するの機會又顯現したるが故に、吾儕が所懷彌よ切迫し、責を感ずるの一層洪大なることを覺ゆるに至りたり。

此に於てか、編者は同志の驥尾に附し、此の精神實行の爲めに大ひに力を盡さんことを決したり。爲めに時を要し、力を要し、亦た四方周流の暇を要すること多からんとす、故に豫かじめ先づ女學雜誌の割愛を要めざるを得ざる也。

凡そ、十年の舊事業は、たゞならぬ情愛を生ずるもの也。編者が女子教育に於ける即はち是れ也。編者は、從來幾多の事に於て先鞭の後塵を追へり、精神の發動せる所ろ、必らずしも、所云る女子教育其事のみにはあらずと雖ども、主として其の一身を許與したる所ろのものは、即はち女子教育の道なりき。

女學雜誌が、社會万般の事に同情を表せんとするに拘はらず、嚴然、題して女學の雜誌と號するものは即はち此の由縁なり。

然るに、編者は、今後凡そ二年を期して、日本人海外傳道の事業の發企の爲めに、其の多くの力を獻げんとす。女子教育專門の事業よりして此事を見れば、緣故太はだ近からざるが如く、吾が十年の舊知己は、此一點に於て編者が操を動かしたるかを奇しまるゝことなきにあらじ。然れ共、編者は、東洋に立てる大日本の天職を念ひ、宗教的東方問題の益す切迫することを感じ、國民對外思想の靈洗を受けざる可らざることを認ため國內教勢の大ひに革新せざる可らざることを信じては、大日本海外傳道の事業の、極めて緊要、極めて有益なることを覺悟し、此が爲めに編者が小身を獻ずることの太はだ感謝すべきことを念ひ、十年の舊知己は、情想必らず悟徹して、終に編者が眞衷の在る所ろを察了せらるべしと信じ、則はち敢て不安の想なきことを得るもの也。

況んや、編者が女子教育に於ける、到底全く因縁を絶つこと能はず。更に所云る「女學」なるものに對するに至ては、一生の小抱負固より之を壓滅することを得ず。更に況んや、多年の同人既に少なしとせず、皆な相助けて女子教育の道を彌よ發揮せられんとするものあるに於てをや。故に、女學雜誌は、今後たとひ月一回の發兌に止むと雖ども、其紙數、其分量、其品質に於て、必らずや、過去と大差なきに至らん也。

讀者冀はくは、多年の情誼を念じ、編者が微衷を察し、女學雜誌の孤忠を憫れみ、編者が新たなる事業に對して同情を惠まるゝと共に、此の老旗幟の爲めに熱愛を寄することを減じ玉ふ莫れ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
明治二十七年十一月二十五日發兌
第四百四號

社說

克終論

始あらざるなし、克く終あるもの鮮なし。朝鮮に對する大日本の義俠は、深く玆に戒愼せずんばある可らず。

宣戰の詔勅にこれ有り、

朝鮮は帝國が其の始に啓誘して列國の伍伴に就かしめたる獨立の一國……

清國の計圖たる明に朝鮮國治安の責をして歸する所あらざらしめ帝國が率先して之を諸獨立國の列に伍せしめたる朝鮮の地位は之を表示するの條約と共に之を蒙晦に付し……東洋の平和をして永く擔保なからしむるに存するや疑ふ可らず……。

即はち是れ帝國、師を出して不義を討ち、以て隣邦の獨立を扶植せんとする所以の神髓なり。

帝國臣民は、此の宣戰の理由によりて義憤し、皇帝の命に順從してあらゆる努力を盡し、大元帥陛下の令に馴服して生命を鴻毛の輕きに委せり。正憤、義戰の記臆、明らかに萬衆が胸に刻ざまれたり。

宇内の列國、驚歎して、此の義戰を望む。天下の人、手をかざして、敬畏せずと云ふとなし。日東第一の文明國は、今や、全世界の物見人に圍まれたり。

帝師、境を出でゝより、連戰に連勝す。不義の兵、非望を遂ぐること能はず、後へに落ちて漸やく本土に逃れ、本土も亦た帝師の占領する所となる。如此く、不義の正義に連敗する所以の者は、皇天昭々として、威嚴尤とも麗らゝかなる所以に因る。上帝、明らかに、我國の義戰を照覽せられたり。

嗚呼、大日本帝國の正義は、皇帝の宣はす所ろ、億兆の記るす所ろ、世界の認たむる所ろ、上天の覽なはす所ろ、天上天下、坤輿、僻陬、夫れ何處に於てか何ものゝ之を否なりと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

するとあらん。

翻つて惟んみるに、近代の恨事は、海外諸大國の眞ことに俠ならざるの一事にあり。其の言ふ所ろを聞けば、正義の言なり、其の據る所ろを見れば、博愛の敎なり。而も、一旦、事を外國に起して、遂に能く公大正明の終を克くしたるものは、殆んど有ることなし。柔を扶けて眞乎に之を剛ならしめ、弱を憫れんで到底之に定力を與へ、能く暴威を制して大仁を遂行するが如きことは、近世の万國歴史に於て曾て見ざる所ろなり。

然るに、大日本帝國は、現十九世紀世界史の末葉を、黄金の綱紀を以て收結せんとす。茲に燦爛たる其の始顕を見たり、今後着々として目的を達するに至り、支那屈服し、仰ひで命を聞かんとし、朝鮮、恩を謝して釐革の道を請はんとするの日、帝國たるもの、彌よ仁義、彌よ正大、以て均當に出師の宣言に適ひ、以て高潔に君子國の美粹を見さんには、大日本國は、近世の列國が未曾て成さゞる所ろの正義を成し、世界の近世史が未曾て記載することを得ざりし所ろの美事を掲錄せしむるものにあらずや。

若し海陸軍の武力を以てせば、文明の器械をあげて、野蠻の

混亂を討つ、未だ必らずしも誇るべきにあらず。若し兵站、遇虜、赤十字等の組織を以てせば、單に所謂る文明列國の伍に恥ぢずと云ふのみ、未だ必らずしも誇る可きにあらず。夫れ、大日本は、世界の自稱文明國が、未曾て成すこと能はざる所ろの正義を成さゞる可らず。其の尤とも誇る可きは、眞乎の文明にあり。其の明らかに示すべきは、君子國の眞相にあり。日本が、全世界の尤とも正義、尤とも高尚、尤とも神聖なる人種に對して（國に對してとは言はず、其國あらざれば也）、其の最上の歎美悅服を受くべき機會は、實に此の時にあるにあらずや。

彼の復讎を恐るゝの故に、今の時を僥倖して過度の巨傷を附すべしと議する者の如きは、強國の干渉せんことを憚りて如今十分の懲伐を爲すこと能はざらんとする者と、同一の怯也。

眞乎、帝國の天職を確認し、帝國は能く大義を守護し大義を顯揚するの實力あることを堅識し、強國に對して毫も憚からざると共に、弱國に對して苟くも私しせざるものにあらずんば、一時の機會を利とし、他の混亂に乘じ、以て漸やく國運を大ひにせんとするもの、流亞と共に、即はち倚ほ同一の對外軟

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たるとを免れず。

六尺の孤を托すべきは、大丈夫也。七たび擒て七たび放つは、大勇將也。個人すでに然り、國家豈に亦た然らざるとあらんや。掌中に緊握したる貧弱國の爲めに眞實の幸運を希圖し、國礎の搖るぐ迄に大打擊したる暴慢國の爲に眞實の改悔を工夫し、此際、毫末の臆病あらざると共に、亦た毫末の私慾なきは、即はち國家の大丈夫、宇內の大勇將に非ずや。

支那の事は、暫らく將來の事に屬す。今や、淸兵、疆後に逃れて、朝鮮國內、只管らに、帝國の保護、啓導を翹望せり。吾が政府は、既に有力の一大臣を送つて、善後の道を盡しつゝありと云ふと雖ども、改革の道、万機に連なり、誘導の事、十年を期すべし。日本人民たるもの、何んぞ只だ之を多忙の吾政府にのみ委すべけんや。當に隆んに渡行して、大ひに其の善後を計り、謹しんで帝國克終の美を大成すべき也。

あか〳〵と日はつれなくも秋の風。

馬に寢て殘夢月白し茶の烟。

廿七年天長節

隱花生

國家由來難局多シ。新舊相賊シ利弊相容レズ、內ニシテハ制治ノ廢弛、外ニシテハ國際ノ紛擾、然リ而シテ億兆唯蠢爾トシテ身ヲ憂ヒ親ヲ思フノ外、亦他事アルヲ識ラザル也。危哉一髮ヲ誤レバ顚沛立コロニ臻リ、否ザルモ尙ホ餘孽ヲ將來ニ貽シ、醞釀多年ニシテ乃チ壞ブル。獨リ天錫英明ノ主アリテ、命ヲ察シ時ヲ制シ機ヲ決シテ以テ其局ヲ處スルニ非ズンバ、國家ハ即チ印度タランノミ、朝鮮タランノミ、將タ淸國ノミ」

顧フニ故ヘノ葦原ノ國、地ハ惟レ蓁莽人ハ惟レ披髮徒跣、而シテ神武ノ烈アリテ帝國ノ基業乃チ成ル。三韓國富ミ物昌ンニシテ西陲爲メニ屢々動ク、乃チ神后ノ勇アリ舟師親カラ之ヲ征シ、一擧ノ下外邦永ク貢聘ヲ納レ、海內此ヨリ寧ク文敎此ヨリ起ル。權門勢利ニ酖リ民俗粗朴ニ安ンジ、而シテ隋唐相尋テ獨リ海西ニ隆ヲ貪ボル、乃チ天智ノ明在リ、忽チ姦兇ヲ懲ラシテ宿弊ヲ正シ、後ノ列聖ト與ニ所長ヲ友邦ニ資リテ以テ朝野ヲ修飾ス、是ニ於テ乎文物粲然。所謂禮樂ノ邦、鬱然トシテ東海ノ表ニ峙ツ。爾來平安ノ驕ト爲リ。福原ノ暴ト爲リ。鎌倉ノ覇ト爲リ。更ニ變ジテ亂ト爲リ。二タビ變シテ暗ト爲リ。三タビ變ジテ德川氏ノ武ト爲リ。四タビ變ジテ維新ノ難ト爲ル、其間一張一弛、一得一失。而カモ審カニ之ヲ察スレバ、此際實ニ幾多興亡ノ新運命ヲ胚胎シテ、以テ當代ニ及ベリ」　噫當代ナル哉。所謂一髮ヲ過テバ、治亂興廢ノ機未ダ度ルベカラザルハ當代ニ非ズヤ。今ヲ以テ古ニ比ブ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ルニ、難易輕重果シテ如何、啻ニ民朴ニ相驕ナル天智ノ時ナランヤ、矧ンヤ草昧神武ノ時ヲヤ。其汲々トシテ力ムル所ハ又啻ニ隋唐ノ糟粕ナランヤ。豈亦徒ニ禮樂之邦ヲ以テ羸弱ノ隣邦ニ誇ルノミナランヤ。夫レ皇天ハ我帝國ヲ與シテ、以テ新文化ノ母國タラシメント欲スル而已」 聞說ラク、原始文化ノ神ニ双兒有リ、分カレテ西東ニ嫁スト。蓋其西セル者ハありやんニ歸シ、ぎりしやニ長じらてんニ老ヒ、終ニ現時ノちゆうとんヲ生ミ、文化靡然トシテ六洲ヲ衣被セリ。若シ其東スルモノニ至テハ、嘗テ一タビ印度ニ興リ、印度滅ビテ支那ニ其隆ヲ極メタルモ、而レドモ支那ノ榮華ハ已ニ去テヨリ久シク跡無ク、世人其蹤ヲ索ムレ𪜈杳トシテ之ク所ヲ知ラザルナリ。始有ルモノ何ゾ終無カランヤ、且ツ母神ノ彼双兒ニ仁ナル豈特ニ西妹ニ私センヤ、是ニ於テ乎知ル可シ、吾邦文化ノ由來スル所既ニ偶然ニ非ズシテ、吾輩當代ノ六洲ニ負フ所亦果シテ偶然ナラザルヲ。然ラバ則チ今ノ時タル、非常絕倫ノ主、上ニ在リテ、億兆、龍鱗ヲ攀ヂ鳳翼ニ附シテ以テ心血ヲ瀝スニ非ズンバ、惡ンゾ此明命を濟スヲ得ン哉」 今上睿聖文武皇帝 武ハ以テ神武ニ儔シク、文ハ以テ天智ヲ兼ヌ、已ニ一タビ維新ノ局ニ當リ給ヒ、回天ノ鴻業立ロニ成ル。曩者東海ノ一仙境、今ハ六洲耳目ノ集マル所。我輩億兆、仰デハ乃チ依ル所アリ顧ミテハ更ニ誇ル所アリ。於嘻 我聖主ニ非ズンバ當代ヲ奈何セン。豈夫レ感奮踴躍以テ聖朝ヲ謳歌セザラン哉。謹ンデ紀念ス、某ノ歲今月今日、祥雲爛兮平安城ノ裡、天我聖主ヲ降ス。今日今朝、旭旗ノ翩ヘル所、皇天祝シ萬邦歡呼ス。聖算萬歲。帝國萬萬歲、

隨感

○昔しの吾友よ

ダルヰンに感謝すべきは、進化論を明確にしたる功績にあり。吾人、其說を味はふヿ彌よ厚くして、人生の趣味を樂しむヿ、彌よ切なり。狹固なる法師は、人類の祖先、猿猴に等しと言ふを聞きて、怫然として怒る。然れども、猿猴と等を同じふせし吾等の祖先が、進化して既に今日の如き高等人種となりたるヿを念ふに於ては、將來の進步のほど豈に樂しからずや。吾等が、母の胎內に兆すや、一點滴の卵子なるヿを知れり、この卵子發達して遂に現在の我となるを恥るヿなし。吾等が、息を閉ぢて形骸を土中に委するや、臭氣芬々として遂に塵芥腐汁となり了る。然れども、此の末路を疑がふものなし。前頭、後末、斯の如し、何んぞ特更に猿猴と伍を同ふせしヿを恥んとすらん。一莖の野花に無限の情けを寄するもの、何すれぞ彼の胡孫先生に古しへを憶ふの辭ばを呈せざる。赭面に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

して滑稽なる其相貌を見るあれば、昔しの吾友よと言ひたげなり。

○前生ありや無しや

或人、佛者が所謂る前生を信じて而も安からざるもの〻如し。蓋し、自から之を迷想となすものか。われ慰さめて曰く、君、何んぞ故意に疑がわんとするや。輪廻の説は、啻にバラモンの人、之を主張するのみにあらず。ダルヰンが言ふ所ろ、プラトーが説く所ろ、豈に亦た一種の前生説にあらずや。人類もと神より來ると言ふもの、亦た是れ一種の前生説にあらずや。すでに創造を信ずれば、則はち前生を信ず。もし忽然として湧生せしと思はんに、尚既に其の前生を思ふヿを得べし。抑そも、前生の何如んの狀態なりしかは、哲學、之を究め、宗敎、之を說き、各々異同あり。其の狀態の正解を得んとするは、人皆な之を待つ。されど、前生に對する本然の意識は、豈に安りに壓抑すべきものならんや。

○祈禱のかをり

凡そ殊勝にして高貴なる人情すくなからぬ中に就て、祈るといふ心ほど尊ときはなかるべし。謙遜にして好く身の程を辨まえ、温柔にして應に崇むべきに賴り、高潔にして只管ら淸聖の德を慕ふ。義、この中にあり。潔白、この中にあり。獻身、この中にあり。責善、この中にあり。高遠にして美妙なる抱負、また此うちにあり。われ、祈るヿなき人を視れば、其勇壯んなりと雖ども、何となく獸らしく、其義烈しけれども、何處にか高慢の氣味あり、たとひ純良にして正善の德ありと云へども、自から慕わしき所ろなし。祈りは、人をして人に王たらしむると共に、天地に對して幼な子たらしむ。言ひがたき趣味此より發す。其聲は、靈精の氣息、其響は、心魂の脈、之なくんば、人の衷の眞の人、活動せざるが如し。世人、往々「祈り」を以て「要め」となし、亦これ一種の慾望なりとす。然れども、祈るヿの主旨は、要求にあらず、歸嚮なり。其の發するや泉の如し、混々として湧き出でざるを得ず、自然の流れなり。何んぞ必らずしも、祈りて而して其の應報を要求するヿをせん、既に祈れば則はち一大事正に了りたる也、安くんぞ之よりして後ち更めて待つ所ろあらんや。喩え

ば偉大の人傑に接近する、既に之に近づき、其風采に面し、之と呼吸を接ゆることを爲せば、一生の希望既に達したり、當該刹那、亦何の要求かあらん。恍として醉へるが如し、遺憾を覺ゆるの餘暇あることなし。偉人に接する猶ほ如此くば、上帝の聖壇に近づきて、面あたり所懷を陳露するの光榮、滿足、畧ぼ推察することを得ん歟。

○復活の奇跡

或人と基督の復活を語たる。われ思ふ所ろを陳じて曰く、復活の事、われに取りて左したる緊要の關係なきによりて事新らしく考がえたることもなけれど、其の有無によつて基督の品格を決せんとする如き人に取りては、之ありけりと確信すること必要なるべし。惟ふに昔し、基督もし眞に復活せりとせば、そは、復活なくんば彼を信奉すまじきほどの頑固者が爲めに催ふされたる顯示なるべし。抑そも、復活の出來べきこと出來べからざる事などを論ずるは、眞とに淺墓なり。復活も亦た凡人が視て奇跡とする所ろ、左れど奇跡そも〳〵成しがたきものならんや。苟しくも、其の人にして、其地位に達するときは、如此き些々事は、何の難きことかあらん。今の理論家なるもの、此類の見解を目して迷信となす。迷信とは、時として、異常の信仰の義なり。あゝ、今の理論の段階は尙ほ低い哉。

○神智靈覺

古人、氣息をもて生命とするの感太はだ味わひあり。神道の一派は、滿腔積聲を發して氣、天に通ずるを以て敬勤となす、之に美妙の理わりあるを見るなり。凡そ、すぐれたる神智靈覺なるもの、喩えば此類の感通か。基督が、父に於て生きよと敎え玉ひたる、亦た此邊の意味なり。若し、心の心を活かし、我の我を起こし、靈氣妙能を振つて、親々然として彼の天地の大御神と一躰たらば、直覺、鬼神の如く、能力、超自然にして、蓋し世に於て知ること能はず、爲すことを得ざる所ろのものは、極めて鮮なきに至らんとす、宗敎上の理想は玆に達するにあり。神學、牧師、禮典、戒律の類、必竟、此の大妙に達せしむるの方便なる耳。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○智慧の味ひ

智慧の味、何んぞ甘き。智慧の世界、何んぞ宏ろき。耳目を開けば、事々物々、新奇ならざるなし、新奇のもの、警絶の智慧を顯わさゞるなし。吾等、學びの心をもて此の人生を歩めば、歩々、蓮玉、歩々、金砂ならざるはなし。嗚呼、大ひなる哉、宇宙の智慧や。嗚呼、深ひ哉、世界の智慧や。嗚呼、高ひ哉、天地の智慧や。奥妙にして、玄邃なり、無量にして、宏漠なり。吾等、此の内に立つ、喩えば、寶山に入り、龍宮に遊び、天堂に昇りたらんが如し。何如なる一小些のものも、絶大の意義あらざるなし。何如なる微塵刧の品も、三万天地に相渉らざるなし。一々、之を學び、一々、之を記臆するも、五躰之が爲めに重きを爲さず、一身之が爲めに不自由を感ぜず、依然として飄々たり、凞々として常に和樂せり。彼の無盡藏より取つて、此の無底庫に納む。身外、身内、天地の量を加えて、宇宙いよ／＼宏ろし。樂しき哉、智慧や。智慧の人生は、永生の世なり、無邊際の世なり、天地を容るゝ凡べての天地の世なり。

○父が子の爲に犬馬となる時

甚はだしき哉、畧と便との誤解妄用せらるゝとや。其人にして之を爲せば、善好の方便、信切の政畧、皆な之を受くるものゝ爲に計りて恰好ならざるはなし。喩えば、赤兒には乳かひ、幼者には扶持し、少年には激勵するが如し。即はち是れ正に必要の畧、即はち正に欠く可らざるの道たる也。政畧、方便豈に輕假卑賤のものならんや。天が人を敎え、大人が世に訓する、悉とく皆な斯の如くならざるはなし。惜しひ哉、小人、其形に倣ひて其誠を學ばず、欺むいて方便に托し、私しゝて政畧に利す、これを以て便と畧とは卑しきものとなれり。かの嚴然たる大人が其愛兒と遊戯するの躰を見よ。或は、馬となりて跳ね、或は犬となりて走る、堂々たる大人物も。小兒が眼前には、暫らく馬となり犬となるにはあらずや。これ小兒を敎ゆるの術なり、即はち、之に適當して正に其道を得たるの便畧なりと知るべし。但だ夫れ、便畧は徑路にして大道にあらず、假りに微力を寄すべきも全力を要するものにあらずなど思はんものは至大の誤まりなり。かの大人が馬となり犬となるの當時は、眞とに滿腔を悉くして犬馬の勞を爲しつゝあるに非ずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○王陽明が所謂る『行』

朱、陸、程、王、の學の別ち、其の理論を以てするは、余が今日に際して旨さする所ろにあらず。但だ、其の講學の傾向、修德の工夫、鍛錬の手段等に至つて、余は太たく王陽明に學ばんとを勉めんさ欲す。去れど、知行合一の所謂る「行」なるもの、王先生が教ゆる所ろは、今人が屢ば唱ふる所さ同じからざるものある也、云く、蓋し之を學んで以て疑ひ無きと能はざれば則はち問ふとあり、問ふは即ち學也、即はち行也。又疑ひ無きと能はざれば則はち思ふとあり、思ふは即ち學也、即はち行也。又疑ひ無きと能はざれば則はち辨ずるとあり、辨ずるは即はち學也。即はち行也。辨ずると既に明、思ふと既に愼、問ふと既に審、學ぶと既に能、又從て而して其功を息めざる斯を之れ篤行さ云ふ。學問思辨の後にして而して之を行に措くさ云ふに非ざる也。是の故に、其事を能くするを求むる以て言は〻、之を學さ云ひ、其惑を解くを求むるを以て言へば、之を問ひさ云ひ、其説に通ずるとを求むるを以て言へば之を思さ云ひ、其察を精うするを求むるを以て言へば、之を辨さ謂ひ、其實に履むを求むるとを以て言へば、之を行さ云ふ。蓋し、其功を析て言へば則ち五つあり、其事を合して言へば則はち一つのみ。

此れ區々心理合一の體知行並進むの功。

故に王氏が玆に主さする所ろは、意にあり。意を誠にするにあり、意を强くするにあり、意を活動せしむるにあり。今の所謂る精神的教育の類也。

○躬行實踐は實物教授なり

外を務め、内を遺し、博くして要寡く、説を立る太だ高く、功を用うる太はだ捷しさ云ふもの、古今學者の通弊なり。文字は紙の如し。紙を隔て〻自然界を窺ふ。讀書は暗誦の如し、暗誦して眞理を覺らんさす。此に於てか、講究、徹底せず、智識、要緊に中らず、所謂る學者は、別世界の觀測者さなり了する也。之を以て實物教授の説あり。而して、修德の敎師が躬行實踐を第一さするも亦た道德上の實物教授なり。

○獨嘯鬱録

破　　默

◎**試ろみに思え**　汝は今ま何万圓の財を善く使用するを得るかさ。金さえあらばナドかこち貌の先生に、ゴロリさ二三万圓を擲げ出し、之を自由に使はるべし但し善く使はるべしさ注文され、當下即時、經綸整然さして直ちに之を活用する覺悟あるもの幾人ぞ。惣べて爲すと有らんさして扨て不平なる先生の當惑は大率れ此の類なり。改革々々さ絶叫して切りに氣焔を吐けもど、然らば改革を任すさ言はれてギヨツトするもの多かるべし。頭を擧げよ、今は即はち大有爲、大革新の時機にあらずや。日本は、俄然さして世界の舞臺に出でたり。不平先生、伎倆を奮はんさせば、濶然さして其道開けたり。茫乎さして其界ひろし。借問す、先生の御用意は何如に。

◎**吾をして云々ならしめば**　さ注文し、其注文の如くならぬによりて如斯く成功せずさ言ひ、怨むが如く、辨ずるが如く、訴ふるが如く、要むるが如き不平家先生あり。之を「云々ならしめば」的の先生、もしくは、注文的の不平氏さ言ふ。斯の如き先生の不平は、到底滿足の機なし、故に永久十分の成功ある可らず。其人常に曰く、吾は未だ滿分の熱心を伸せしとあらず、十分に盡力するほどの機會なきが故也さ。か〻る先生は、終身、熱心さなる可き機會なからん。其の「云々ならしめば」は終身止むとなけん。何んさなれば、一段、一段、望みは増加して、もさより盡期あるべき筈なく、元來、此の所望は、自己が弱點をかくす體裁よき言譯なれば、行く所ろさして、此の言譯に假托せざるとあるまじければ也。

◎**古賢先生の言行を讀んで**　切りに感嘆し、賞揚し、演説し、風聽するものあり。而して、其の本心は、自己が之に倣はんさするにあらずして、自己が平ならざる所ろの當手をして之に倣はしめんさするにある也。他を改むるに、自己が力の足らざるを知る、頗ぶる謙なるに似たれど、實は然らず。謙なるにあらず、狷惜しみのみ。必竟、余外の力を假りて、他の平ならざるものを服さんさするに過ぎず。

◎**人は感情の動物なり**　さ喝破して幾分辨じ得たりさ澄まし込む論士あれども、人は感情のみの動物にあらざるをいかんせん。

◎**人間なれば弱點あり**　さ辨護して人の德を成すさ思ふ仁者らしきもの見ゆれど、斯くゆるす弱點ほど弱きはなし。到底改まるとあらじ。

◎**現在の理想は天使也**　天使さは、先づ今の人に相應する最高の人間らしきものなり。旣に天使界に達して見れば、玆に惡鬼あるを見る。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女　學

女學界今後の大勢

男女の關係は、内外陰陽の關係なり。これ、自然天稟の定めにして、古往今來、消すと能はず。

但だ夫れ内陰、外陽、相ひ對するの區域、度合ひの何如んは、正に人事世態の進歩何如んによりて決す。昔しは、女子の『内』なるもの唯だ家の内にてありき。故に、家内とも言へり。左れど、家内は、尙ほ外向の用繁げき商家町人の婦人に付きてのみ稱えられたり。外界よりひそめると更に遠かるべき、士らひ高家の婦人に於ては、奥様と言はる。これ、直ちに家の内を婦人の内とせず、更に家の内の内たる其奥をもつて婦人の内と定めたるの由來なり。

内の狹まるは、外の近づくなり、外の狹まるは、内の縮まる也。たとへば、表裏のごとし。表廣ければ、裏も亦た廣ろし。表膨脹すれば、裏も亦た膨脹す。其の相關するや、兩々双々として、常に比連相對を止むとなし。

此故に、男子が從事すべき外界表陽の區域、擴ひろまるときは、之に伴侶せる婦人が内界陰裏の區域亦隨がつて擴張せんと、太はだ明白なり。國家の時勢もしくは個人の職業によりて、婦人が運動の境界、或ひは廣ろまり或ひは狹まるは之が爲め也。女子が行爲の現象の古今に相ひ違ふとも、其の男子に對する關係に於て前後顚倒せるにはあらず。現象は、時に隨がつて變應す、天理は忽然壞すべからず。然るに、其現象をすら、古往今來一樣にせんとするもの、又は現象の變應につれて天理をすら隨滅せしめんとするものは、二つながら誤まれり。

外交官の夫人は、田舍の舊家の夫人と其の内界を異にす。これ、主人が外界とする所ろの相ひ異なるが故也。商家小店の夫人は三井鴻の池の夫人と其内界を異にす。これ、主人が外界とする所ろの相ひ異なるが故也。夫人すでに内助を以て德とす。主人が外界異なり、職業異なり、交際異なるに應じては、其の裏面となるべき夫人が内界の亦隨がつて變ぜんは、自然にして正當なる事とす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

封建の時世、天下の事業大抵舊株を守り、人事大率ね變化あることなく、すべて男子の爲す所ろ年々代々、職として一定不動の趣きありける比ほひには、婦女子が内界として立こもる可き區域も亦た異同あることなかりき。是れ、其の相ひ對す可き外界の一定不動なりしが故也。一定不動の外界、一定不動の内界をつくり、一定不動の内界、一定不動の女風女德をつくる。女子はすべて斯々の樣にて内に在るべし、云々の躰にて内に助くべしと確定せられたるは、蓋し當然の勢なり。

封建守舊、保守沈滯の時世に於ては、當に斯くあるべし。既に万國と交わり、世態日々に化わり、人事の激變寸刻も止まざるの時世に至つては、男子が隆んに從事すべき外界の區域、日に變じ、月に變じ、人によりて變じ、職によりて亦變ずべし。何んぞ、年々一定不動の躰を求むべけんや。男界すでに一定不動にあらず、安くんぞ、女界の沈定不變を求むべけんや。之を求むるは、眞乎に、内助を要めざるもの也。男女の同伴を望まざるもの也。内外の正しき關係を覺らざるもの也。これ守株の人、時所位に迂なるものと云ふべし。

以上の理由によりて、試ろみに、明治六年以來、婦女子が境

界の如何に變遷せしやを推究すべし。明治六年、改良革新の氣勢興して、男子の眼界、外に向つて數段擴張せし比ほひは、之に伴ふべき女子の内界の隨がつて擴張せし時にてありき。同八九年來、男子の眼界たゞ内にのみ偏し、同胞の相争そふことにのみ僻したる比ほひは、女子の内界も狹まらざるを得ざりき。同十三四年來、男子ひたすら人權政權の擴張に熱中する比ほひは、女子の内界も激せざるを得ず。同十七八年來、歐化主義行れて、男子の交際外に向つて突進するときは、女子の内界も亦た數歩の外側に突進せざるを得ず、男女相携する舞踏の變態が、此頃に隆んなりし所以を察せよ。西洋的女子教育が、狂ふ計りに激揚せし所以を察せよ。

然るに、明治二十一二年來、保守的反動起り、西洋を非として、日本を優れたりとし、和學起り、歌、俳諧起り雅樂起り、束髮減じ、和服殖え、何事にも、日本、日本と激賞して、男子の眼界、専ぱら日本内にのみ集注し、たとひ氣骨は賞むべく、熱情は悦こぶべきも、當の通弊として、内に局し、外に斥ぞくるの大勢を生ずる事となりたる時は、男子が外界とする所ろの大ひに狹まりたる時也。男子が外界、狹まり來るは、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女子が内界の隨がつて、引退ぞくと也。たとへば、相押しの如し。彼れ押し來る故に、此れ退縮せざる可らず。之よりして、女子が立こもる可き『内』はやうやく狹まくなれり。交際社界より女子は退隱したり、女學校より女生は退校したり、客間より夫人はかくれたり、談話よりミセスに付ての挨拶は省かれたり。之れ別段の變事にあらず、大勢より生ずる自然の結果也。之に喫驚して、新たに男女の關係を論じ、矢張り、女子は昔し風にすべきものなるやと疑がひ出し、女子敎育者當路の人すら追々疑がひ出し、女子敎育は一問題で御座るなど究辯を吐きて、其下に困却の意味を存するなど、總べて笑止至極の沙汰にてありき。大勢を辨じて、人事應變の秘訣を穿たざるときは、つねに如此き誤謬に陷いる者也。

然るに、如此き杞憂家、落心家をして、再たび意外の謳歌を奏せしむべき大勢は、之よりして出で來らんとす。何んぞや、男子の外界、一大變動を起さんとす、故に女子の内界も亦た一大變動を惹起せんと云ふと是れ也。

此の一語によつて、既に秘密は明白ならん。今や、日本は、東洋の舞臺に出でたるのみならず、世界の舞臺に出でたり。

世界の舞臺に馬の足の役として出でたるにあらず、大立物として出でたり。此戰爭大捷利を以て終りたる後は、大日本の光景將に如何んならん。條約はすでに、改正せられ、内地は何處も雜居となり、東洋の盟主、世界の大强國となり、貿易俄然として擴張し、交渉應接數十倍の頻繁となり、大日本は數年にして、ロンドン、パリ、ニウヨーク、と隣り合せの大繁昌となるべし。

此時に於ける男子が外界は夫れ活潑なる哉、洪大なる哉、頻繁なる哉。之に伴侶すべき女子の内界の擴張は、夫れ何程ぞ。此時に至れば、女は矢張り家の内に居るべきものぞと一度び叱つて追込みたる夫人の手を執り、早く走り出でよ、何故に左樣に遲き、早く走るべし、何故に左樣に遲々たる、吾に伴隨すべし、十分驅足すべしと迄で迫まるに至らん。此時に至つて夫人たるもの臆すると勿れ。郎は明治十七八年に一と度び妾を引張り出し、舞踏、交際に引廻し玉ひ、今の女は大活潑ならざる可らずと自から敎化し玉ひ乍ら、暫時にして矢張り汝は家内に引込むべきものぞと叱り玉ひたるともあれば、此度も亦た數年にして變はるべし、再たび無益の徒勞を爲し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

餘計の入費をかけ申さじなど怨言するとなかれ。國勢に隨がつて、男子の外事異なり、之に隨がつて内助の區域を伸縮するは、夫人たるもの丶當務にあらずや。

夫れ、女子が内界此如くして變應せん。其の境界の異なるは、之に對して求むる智識の異なる也。之を求むる智識の異なるとは、今の如く古風の女學にて宜しとせる學風が、再たび開進すると也。吾黨は大地を打つて明らかに證言す。女學は一二年にして大ひに改進すべし、今後の文明的女學界非常の繁昌を爲すべしと。

此の證言は、預言なり。預言者の預言にあらず、何人にても少こしく大勢を知るものは、皆な贊成すべき證言也。たゞ吾黨が痛憂して措かず、微力を呈して方針を善導せんとする所ろのものは、再たび西洋的女子敎育の誤謬に陷いらしめずして、之を新日本的の女子敎育たらしめんとするとこれ也。更に基督敎界に於て言はば、傳道會社的女子敎育たらしめずして、日本獨立敎徒的女子敎育たらしめんとすると是也。

嗚呼、新らしき女子敎育が今後直ちに勃興し來らんとは、火を見るよりも明白也。此の大勢は、何人も防ぐ能はず、亦、何人が合力せざるとも必らずや自から進み來らん。たゞ夫れ、此の新大勢をして、西洋的たらしめずして、眞の新日本的たらしめ、宣敎師的たらしめずして、日本敎徒的たらしむるには、大なる盡力を要す。此の盡力の多少は、即はち一の戰爭なり。其の勝敗は、深く關心すべきもの也。惟ふに、此れ大勢に際して盡すべき人事の最大要樞ならん。

嗚呼、女子敎育に盡すと云ふ、何んぞ必らずしも、女學校敎育のみの謂ならんや。須からく、事の大躰に觀るべし。大勢を制せざれば、區々の杞憂に沒溺するに止まるとあらん也。

女學校の裁縫敎師

女學校の裁縫敎師は、其の校長又は取締に劣らざる要職なり。最とも人を撰ばざる可らず。其人は、最とも愼しまざる可らず。

抑そも、裁縫敎授の女學校に於ける、之に幾多必要の理由あり。第一、女工の中心とも云ふべき縫ひ針の藝を學ぶ可きとは申す迄もなし。其外此の科の稽古は、女學に於ける一種の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鍛練にして、凡そ、理窟なきことを繰返し、同一の事に辛棒し、燥々しき心を鎮め、手わざの勞役に慣れ、人知れぬ微細の所ろに思ひを凝むるが如き修業は、主もに此科に於て執るべきものと知るべし。一言するに、周密、沈着、忍耐、勤儉等の諸徳は、主として、此の敎科に於て訓練すべきものなり。故にむかしの名高き某女學士は、深邃なる哲理を考ふるとを常としながら、好みて手づから裁縫し、太たく此業を重んじたり。喩えば、大學者ジョン、スチウアート、ミルが、煩はしき植物學の分類に心掛けて他日精奥なる論理學を結構し、亦、俗々しき銀行家の繁務を執りて、異日洪遠なる經濟學を大成したるが如きか。理窟を好む女學生には、兎角意味もなき只だ煩はしき者の如くに思はるゝ裁縫の學科が、女德の鍛練に關係切なるの由緣、之によりて諒察するとを得ん。

夫れ、女學校、裁縫科を置く所以、既に如此き遠大の理由あるが爲なるとを知らば、其の敎師たるものに、工藝上の熟練の外に、更に尤とも緊要なる一物を要するとを直ちに明白なるべし。即はち、仕立職の裁縫家は、たゞ裁縫に巧みなるを以て十分なりとすれども、女學校の裁縫敎師は、寧ろ人物沈着温厚にして周密忍耐の德に長じ、其の裁衣、運針の方を敎ゆる時、此の藝に包んで肝腎の心得を女生に吹込むの覺悟なかる可らず。これ豈に尋常一と通りの裁縫敎師が能くすべき所ならんや。

加之、女學校の敎師の中、其生徒と相接するとの、裁縫敎師ほど、寛るやかに、時長く、且つ近しきはなし。即はち、裁縫敎師は、直接感化を施こすに最多の便利を有する也。

されば、此便利を善用して、運針縷々の餘暇に、清潔高尚の談話を試ろみ、只管ら世上の好き評判を撰み、古今の勝れたる人物を語り、專ぱら德性涵養の工夫に力を盡さば、其の談話は、牧師が説敎よりも効あるべし。牧師は、講壇の上より七日に一度いと遠々しく説敎する也。何んぞ彼の膝を交へて最と靜に而もたび／＼相語らふとの感化力多きに及かんや。

斯る便利は、之を善用して其の効能多きに隨がひ、もし之を妄用せば、其正比例に大不測の害あらんとす。裁縫敎師たるもの、ヲシヤベリの隊長となり、批評の大姉となり、兎角、人のアラを見付けて、之を面白く暴露するを、唯一の手柄とし、更に太甚しきは、卑陋下賤の話しを善きとにして、遂に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は如何はしき俗事の傳授となり、裁縫教場はあげて、女學校中の井戸端會場となすに至ては、たとひ校長が如何に殊勝の勸告あるも、たとひ取締が嚴正なる仕付あるも、一方此の大なる冷温器ありて、容赦なく女生の德を冷却せしむべし。

裁縫敎師の大任は斯の如し。然るに、今の裁縫學校の抱負毫も此の邊に存せざるのみか、裁縫敎師たらんとするものゝ、抱負も亦太はだ低し。これ今の裁縫敎師に遺憾多き所以なりされば年少有望の女學生、先づ己れ其人になるの覺悟を奮起せんこと太はだ肝要なり。

菊女と云へる方への答

淺からぬ同情はありながら如何にして答へ參らすべき餘りに立ち入りたる内事と存ぜられ候へば平和を旨としての取計らひより反つて不和合を惹起し申さずやと案じ候ひき。左れど外に詮すべもなければ玆にてあら〳〵申述候。夫婦感情の一致せざるは人世最大の恨事にして凡そ不斷直接の苦痛之に過ぐるものはあるまじくと存候。厭世自殺など申す者は大抵室家の不平より起り候。ことに男子が外界の困苦に出であふは寧ろ戰爭の如く苦しき中にも一種の愉快はある者に候へども家内に於ける不愉快に限りては到底堪へがたきものに候。女子とても亦た其樣にて女の身の寶は良人の情けと心切との外になきものゆゑ之に冷遇せらるゝほど苦しき事は候ふまじ。既に斯の如く相合へば世界第一の幸福あり、相合はざれば人生最大の恨事となると知れたることゆゑ、双方相つとめて互ひに愼しみ兩方にて利己我儘の念ひを斷つときは、切度和樂すると疑がひなきことに候。左樣に申さば吾は決して利己我儘を爲すことなしと誰も申出らるべく候へども凡そ不和合の夫婦にして双方に我儘のきざしなきは無之、又双方に此念なくして不和合の結果あらん筈決してなしと確信致し候。先方が信切なる故に此方も信切にす、先方が情けあるに動かされて此方も好く仕へると云ふは、利己に違ひ無之候。女は愛さるゝ故に愛すと詩人が歌ひしは、未だ戀ひせず未だ嫁かざる乙女の時の事を申すものにて、一たん身を許し操を定め終生此人と定めたらん以上は善惡熱冷にかゝはらず其の誠を盡すが道と申すもの亦た慕ふは女の眞心とも申すものにて候。成程、

感情の不一致ほど致方なきものは無之。取わけ朝夕同居同伴する人と感情の相ひ逆らふほど苦しきとは無之候。然し乍ら如何に苦しくとも最早致方なしたゞ一日も早く此苦しみを去り我も人も互ひに幸福にくらすの外なしと觀念を定めなば、日々限りなく此の苦しみの中にあらんより、奮發して感情を善くする方に勉むるこそ遙かに苦しみの少なきものにて候なれ。然るに此の奮發の出來ぬは即はち我慢にして我儘と申す外無之候。「向ふがすれば」と思ふ心、根になりて兎角、吾より心を開かざるが此時の我儘と申すものにて候。向ふ次第にて、此方の心を開くとは、市人の覺悟とや申さん、夫婦の道にてはあるまじく候。全躰夫婦は、此上なき恥かしさを互ひに忍び万人に示さゞる秘密を互に打あけるものなれば、人世に於て此ほど親しみ易きものは無之筈に候、左候へばこそ亦た些細の事にて相ひ害なふことあるなれども、一たん飜然相悟らば元に復して和樂するは自然の流の如し、水の下きにゆくと異ならず候。夫故、世話にも夫婦げんくわの仲裁ほど馬鹿らしきものはなしと申候。中裁人が馬鹿を見るほどに早く和合し、和合したる曉は一層馬鹿を見るほどに頓と構はれぬ故に候。然し乍ら之は目出度事に相違無之候。右様の譯ゆゑ、先以て利己我儘を抑へ、自から進んで率先一層の誠を盡すと第一の快復手段に候。此の「自から進む」の一句くれ／＼も御注意被下度候。御前樣御夫婦は、英學の御心得もあるとゆゑ共に詩歌を見玉ふなど甚はだ宜しく候。又、可笑しき事ながら、東京ならば新内ぶしなど云ふ、情緒を振ひ起し、縷々焉として斷えざる所ろに人をつなぎ人を生かす微妙の音を共に聽かるゝも宜しからん。斯る見聞にて情一とたび動きし所ろへ、かの「自進率先」の方によつて先づ身から心切をつくし誠を傾瀉せられなば、忽まちにして其報ひあらんと疑がひなし。而して此報ひほど迅速にして且つ効能多きものは他に類なきとに候。

○悲しむべし、今の女學生

悲しむべし、今の女學生。なまじひに、伉儷についての理想高められて、現在の意に滿つるものなく、不幸、いくたびか涙を灑ぎて、秋の野づらの孤木をあはれむ。一聲の雁のさけび、大空のひとりの月、抑も伴侶なきのさびしさや、いかな

らむ。

むかしの夫婦の道は、定められし道なり。妻は、如何なることありとも、夫に從がふべきものと定まりたり。此處ろに、戀愛の秘訣を問はず、情思相合はんことを要めず、只管ら、父母の命に温從して、家の血統を傳續することを第一とせし也。此時に當りては、之に從ふこと義なり、義に從ふこと道なり。道義に從ふは、即はち人の生命にして、最後の平安之に過るものあらず。古への婦人は、之によりて平安を得たり。今の人の想像するが如き困苦の人にはあらざりし也。

只だ憫れむべきは、現代の女生か。必らずしも、古への女德を以て、道義の殊勝なるものとせざるが故に、之に從がふは、即はち最上の道義に從がふ也とも思惟することを得ず。平安之よりして湧起することなし。而して理想は、空しく高く掛り、希望は徒らに切に招きて、反つて此の可憐の人をして益す悶痛せしむ。今の進歩せる女生の苦しきは、古への辛苦せる婦人の苦しきよりも苦しかるべし。

亭主鬱散錄

石翁

●西洋理想の眞人君　切りに嗟嘆して、ホームが思ふやうにあらぬとて不平をこぼす。われ慰さめて曰く、ホームの樂しきは、亭主好くいたはり、夫人能く助け、亭主好く護り、夫人能く慰さむるによつて來らずや。而して、君が能く護り、好くいたはるに、之に感激せざる女性は尠なからん。君は、先づ夫人をして率先して己れを慰助せしめ、而して後ち徐むろに之に施さんとすらん。此の「徐むろに」は宜しからず、君先づ率先して施こすべし。

●某家の奥樣は賢夫人　なり感心なりと、自己が心中に唯だ獨り賞贊するは差支へなし。之によつて直ちに吾が妻に比らべて見劣りするなどは薄情なり。況んや、之を夫人の前にて激揚し、ちと反省せよと裏面に諷するの態ある、尤とも愚なり。先づ以て、かゝる賢夫人ある家の亭主は如何にと問はるべし。所謂る辨慶の少なきにあらず、義經のなき也とは、此邊の覺悟なるべし。

●兎角家内が太平樂で　少こしも余が心中の苦しみを察しく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れぬ、實際の貧乏にも同情を表しくれぬと不平をこぼすものは、大率ね先づ其の實際のまゝを打あけず、齊人の如く妻の手前を飾り居たるが爲めなるべし。眞實に打あけて赤情を示すべし、妻は反つて喜こび、感激して奮發すべし。イルビン氏、眞とに好く此の秘訣を寫し出せり。

◉歸つて見て家の片付き居らぬは、隨分不快なるものなり。不快とは、大事件の時に左程大ならず、小事件の時に反つて大なるものなり。御亭主の不愉快も左るとながら、狹き家にて終日の立ち働らき、況んや子供の無頓着に亂すなどあれば、思ふやうに片付かぬは恕せざる可らず。亭主自身の仕事にても、隨分片付かぬとは多かるべし。大抵、自分の仕事が好く整理せずして、ムシヤクシヤ腹にて家に歸る時、尤とも多く家内の取片付かぬが不快なるものとぞ。此所ろ、道理あるらしくして、實はちと我儘にあらずや。

◉亭主關白の位ひありと定まりし昔は昔し、關白が無くなりし今日は、多少勘辨もある筈なり。日本は世界と交際し、國家は憲法を布くの今日、一家内のみ專制の古風を行なはんとは無理ならずや。

◉三度の食事は亭主殿の爲めにのみ調理すと思ふは殘酷ならずや。亭主は外に於て御馳走を召し上るともあれど、家人こそ千古万代たゞ家の料理にのみ樂しむなれ。此人々の口に合ふやう鹽梅せしむるが寧ろ當然ならずや。汁のカラヒ甘ヒ、何んぞ人を叱かるの價ひあらんやとは、大西郷が洪洋濶天の度量の跡なり。

◉兎に角一家の若干人君を主とあがめて生死を之に托し、君あれば夜も安眠せらると言ふほどに寄り賴むと思はゞ、大丈夫何んぞ義俠なかるべけん。所謂る獻身とは此邊に盡すの謂ひならずや。而して、獻身とは、自分が樂を爲し、自分が愉快を求むるの謂ひならじ。君もし此の所ろに覺悟せば、何の不平鬱悶かあらん。あるも忽まち散ずべき也。

◉シエリダン曰く、婦人は我等を支配するものなり。我等をして彼等を完全ならしめよ。彼等の進歩開化するに隨つて、我等もいよ〳〵進歩開化すべし。天然が男性の胸裡に銘鐫する事は、即ち女性に賴りてなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

評論

教界大勢論

基督教新教界

茲に題して教界と云ふものは、専ら基督教界に付きて言ふ。是れ單に好む所ろに偏するの故にあらず。今の一般布教に於て、將來の弘濟救導の任に當るべきもの、必らずや、基督の教ならんとを確信するが故なり。

佛道、日東に渡りてより、幾度か新門派を生ず。而して、主唱立旨の發頭たるものは、皆な一代の人豪なり。彼等互ひに對敵して、異説を相撃つ、末流遙かに之を眺むれば、睍々として讐の如きもの、抑そも衷情眞懐の秘密を示さんや。試ろみに、法界幽昧最とも邃きの處ろに、主傑互ひに團欒して各自の所信を傾盡せしむれば、夫れ莞爾微笑して點頭せざるとあらんや。彼等が大國の一隅を指ざし、強ひて偏執の理を守らんとするものは、時勢にある耳。但だ小人之を用ふれば、策となり、大人之を行なへば、慈悲となる。要は、利他の爲めに制すると、利己の爲めに制せらるるとの差、則はち千里の懸隔を生ずる也耳。

佛界の前途もとより光明なきにあらず。然れども、其光明は、燈火將に滅んとし、暮色將に落んとするに先だち、暫らく名殘りの蒼明を反發するに均しき耳。晩秋の小暖は、豈に一陽來復の春天地ならんや。

故に、將來、濟世救民の大傳道者、我國に出づるとありとせんか、余は必らず其の基督の道に依らんとを信ず、基督に對する幾多の神學説は、乞ふ悉とく之を棄てよ。單に其の人品に接して高徳を窺ふに於て、神戀精慕、万事を措くも尙ほ此の大師人に隨がはんとを欲する底の赤誠なくして、如何で能く今日の民に道を説くとを得んや。余は將來の新らしき大傳道士は、必らずや基督の道に據らんとを信ず。

余、茲に於てか、先づ現在の基督教界に付きて、其の大勢を觀察せんとす。殊に「新教」に於てするは、辨を待たざるの理由による。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

風雲大に來らんとす

現在基督教新教界の實相は、將に大解躰、大破壞、大變革の事あらんとする也。

そは、思想の上に於て言ふにあらず。思想上の變動は、既に大方經過したり。個人傳道の法に於て言ふにあらず。個人傳道の方法は、千古一定せり。玆に將に來らんとすることを破叫して疑がはざる所ろのものは、教徒連合の組織、教徒運動の組織、教徒制裁の組織、一言するに、其の『教政』に於て、將に一大風雲を捲き來さんとしつゝあることを默認すること也。

言ふ迄もなく、京に田舍あり、戰國に天下太平あり。現在の教勢を無事有望なりとし、切りに御惠みに感謝して、天國の到來を夢みつゝある樂天家も多くあるもの也。數に於てせば、此種の人固より多數ならん。望に於てせば、太平の贊美を歌ひたきもの多かるべし。然れども、根底既に動搖したり、先鋒既に刃を接したり。大戰爭は到底免かる可らず。

法外の新撰組

試ろみに、近時數年、何如なる人種が尤とも多く教會より脫したりやと見よ。

少こしく矯激の語を放つことを許さば、吾黨は應に斷言すべし。現に教會に屬し、其集會に謹直に列するものは、達觀熱信の忠情確乎として動かず、超然、說教、諸集會の外に逍遙遊して、獨り孤忠の誠意に慰さめつゝあるの人士か。もしくは、碌々平凡、たゞ習慣によつて習慣の如くなる人士かの二種に限らるべし。

彼の慷慨にして熱情ある、潔泊にして義氣ある有爲多望の青年士流に至ては、幾度か教會の爲に改革說を提出して皆用ひられず、幾度か涙を揮つて皆な顧みられず、狂ふ計りに勸告して皆な笑われ、死する計りに慨歎して皆な嘲けられ、彌よ憂ひて彌よ激し、彌よ激して彌よ中庸を失なひ、遂に斷然教會を脫して流浪するに至りたるもの、近年必らずや、多からん也。

彼等が教會を出づるや、尙ほ之を憂思するによりて反動するを常とす。昔し尤とも嚴格なりしクリスチアンは、今や洒然として笑ふ。切りに、當年の究窟なりしことを覺る爲して戒

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

律の小供らしきを嘲けり、故さらに、放浪遊蕩して、基督教的道徳と目されたる幾多の誡しめを正面より破る。或ひは故意に酒に耽るものあり、或ひは故意に藝妓に戯むるゝものあり。其の放慢にして律なきが如き所ろ、正にこれ限りなき勃々たる至情の反動する所ろ、彼等時あつてか獨り泣かざるヿあらんや。余輩、此類人士の言行を見聞する毎に、密かに其の由來を憶ふて涙なきヿ能はず。

且や、此流の人士、一と度び、生死の問題に經驗して、今や全く宗教を忘るる能はず。大抵、佛教に入るを常とす。而かも其の佛教を味はふや、超脫無爲の大禪定に達するヿ、太はだ難し。其の情火は燃つゝあり、其の慨氣は躍りつゝあり、其の不平は逆捲きつゝあり、何を以てか枯淡聖澄の大寂滅に入るヿを得んや。文字の佛教らしく、言語の佛教らしく、動作の佛教らしきに係らず、隱然として、或る一物をのこす。狐狸、人に化けて、意はざりき尻尾を隱さゞるが如し。本然の至情到底沒了するヿ能はず。

嗚呼、此流の人士は、牧師先生よりは、墜落したりとして心配せらるゝもの也。篤實なる老婆老翁の善信徒よりは、時に殊勝の祈禱をすら捧げらるゝもの也。嗚呼、何等の顚倒ぞや。牧師先生の爲には、反つて彌よ墜落の地に踏入るなるべし。善信徒のあつき祈りの爲には、乞ふ憂ふる勿れと言ひたげ也。忘るゝ勿れ、此流、放浪青年の過半は、イザ基督教界の大事と言はん日には、則はち眞先に馳せ加つて、水火の中にも飛入るべき、大硬骨の勇者なるヿを。

宗教は保守也又進步也

審勢は、杜鵑の一聲に掛る。新撰組の勃興は、幕末の大解躰を示さずや。能く時勢を觀るものは、前段の一例によつて、秘密の中心を穿つに餘りあるべし。注意せよ、今の新教界の大勢は、即はち是れ也。

惟ふに、今の新教界、もし此儘にして數年を過さば、彼の反動せるものも、遂には睡り、彼の慰さむるものも、遂には衰ろへ、今の忍ぶものも、遂には破れ、今の新らしきものも亦舊るび、表面、新教徒と稱して其敎會に正屬する面々は、宛然、第二の佛教徒となるべし。

凡そ、宗教なるものは、極めて保守的にして、亦尤とも進步

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

的のもの也。世々、其の新らしきものを發芽せしめ乍ら、同時に其舊きものを遺すを常とす。佛教の多くの宗派續々として現はれ、盛衰相ひ踵びで而も尙ほ悉とく同存するが如く、基督教界の更に多くの宗派、皆な混然として同もに生存し、而も不斷、新らしきものを發出することを止めざるが如し。思ふに、今の新教界は、更に一種の新らしき教派を此日本に於て、生成すべし。

時勢の震蕩既に如此し。前途の需要大率ね推察せらる。近く、一大變革のあらんと、天日の明るきよりも明るし。

一生面の診察

試ろみに短識を用ゐて、來るべき革新運動の大態を推察せんか、

一◎　新教各宗派中の同志者によつて發起せらるべし　人或ひは、無宗派と言はんか。これ誤まれり、今までの宗派は猶ほ藩の如し。來るべき運動は、維新の革命の如し。藩中の有志先づ結托し、天下の大勢に向つて一大打擊を加ふることを得れども、所云る藩を廢して縣を置くの事は、維新後四年の事業となす。

二◎　獨立大日本的なるべし　今や國家は、朝鮮及支那の改革の爲めに義戰す。夫れ、國家は、他邦の爲めに力を盡すの大獻性を爲すに、精神上の率先者となり、此國家の精神に傳道せんと抱負せる一團躰は、反つて外國人の補助によりて成立すと言ふの理あらんや。

三◎　海外傳道の抱負あるべし　前段記述せる國家に傳道せんとする如き大有爲の團躰は、此の國家の大勢に先だちて、海外迄にも其の傳道力を伸張せんとする程の氣力なかる可らざるは明白なり。

四◎　信仰は寛大にして確固なるべし　所謂る信仰箇條の如き、神學說の如きものは、今に於て喋々するが如き學問的、理論的なる可らず。生命ある信仰は、神に向つて密接すべし、此の生命を切要とすると、今よりも更に嚴密なるべしと雖ども、此を有形に審査するの方法は、實行に由るの外ある可らず。故に、團躰の連結は、倫理上の德行により、其の制裁は義を以てし、基督の忠臣たる新日本の武士氣質を以て相約する底の趣きあるべし。

五　教會及び牧師は自給なるべし　少なくとも創業時限の牧師は大率ね自給なるべし、但だ中央主動の傳道者は、衆望に要せられて、其の義捨金によつて天下に周説せざるを得ず

六　外國宣敎師と好感情あるべし　所謂る忘恩的の過激ある可らず。日本有志新敎會の獨立は、義に於て彼等の慶賀贊成を得べき道筋を履まざる可らず。而して、或る事業に於ては、之と共同すべし、若くは之に助力すべし。要は、新敎會の要素が之によりて維持せられず、明らかに獨立すると是れ也。

只だ主動者を望む

嗚呼、現狀既に慘憺たり、前路大抵明白なり、たゞ欠く所ろのものは、發言主動の人物これ也。

この人や、尤とも擇ばざる可らず。陳勝呉廣は、もはや用なし。局部の小改革は、今や寧ろ大勢に害あらんとす。此時に當りて、尤とも面倒なるは、其人にあらざる人の主動これ也、何んとなれば、この主動暴りに起らば、暫らく大義の爲に其の倒るゝを待つか、もしくは準備未だ完からずして早く之に加合せざるを得ざれば也。故に大成既に到り、風雲將に來らんとすれば、人々謹愼、嚴そかに祈りて只管ら天命の其人の上に下るを待たずんばある可らず。今は、即はち、瞑目閉息、挺然、將に發せんとするの機也。

西郷隆盛傳を讀む

勝田孫彌君著わす所ろの西郷隆盛傳、第一卷より第三卷に至る迄を通讀す。

此傳、確かに隆盛傳中の最良のものたり。茲に初めて首尾連續し、因果明應したる好傳紀を得て、近代の偉人が眞本領、やうやく發揮せらる。

余が、就中此傳の所長として敬重する所、大畧、左の二件なり。

(一)　好く包圍の時勢に對する關渉を顯わしたる事　大抵、尋常の傳紀は、切りに褒賛し、もしくは妄りに貶して、たゞ其人の行爲を記すのみ。何の故に此時如此くしたるやの由緣に至つては、嘿として言わず。偶たま言ふも漠として要緊に中らず。此をもつて、遂ひに其人物の眞相を顯明すると能わざると共に、亦た讀者をして就いて眞實に鑑顧せしむるの力

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あるとなし。然るに、此書、材料の豐富なると。講究の着實なると。著者自身、身を其地に置て「我若在則將如何」の慨あるとによりて、傳中の人筆々活動し、包圍に對して觀じ、時勢に應じて畧策するの生氣面あたり見るが如し。之れ、文章の壯大偉麗なるが故にあらず、論評の必らずしも大人らしきが故にもあらず。必竟、時勢に對する關捩の妙機を十分顯明したるの故にありとす。之を以て、讀者もし仔細に講讀し行く〳〵傳中の人を追ふて、其が活動の勢流に入らば、正に是れ、柳々州が舟行若レ窮忽又無レ際なる者、屢ば究し屢ば達して、偉人正大に世に盡瘁するの行路を眞個に履み學ぶとを得べし。

此傳第一の所長、斯の如し。隨がつて自から第二の結果なかる可らず。云く、

(二) 隆盛が眞本領大ひに發揮したる事　此傳もとより西郷を中心として四方を觀察したるの故に、一見する所ろ、余りに多く彼を主動者の地に置き、又余りに多く彼に万能力を寄せたるやの觀なきにあらずと雖ども、此は傳記の性質に於て恕せざる可らざるもの也。時勢を達觀し、之に處する正明の大道を直覺し、内外公私の別を明らかにし、信義情愛の理はりを盡し、暴ならず弱ならず急ならず緩ならず、着々順路を履んで而して後ち達し、循々人事を盡して而して後ち天命を待つのおもむき、此の傳に於いてや初じめて明知せられんとす。

余は此の二件を擧て、特に此書の所長となさん。たゞ西郷能く如斯く偉大となりたるの因緣を敍し、彼が修養砥厲したる工夫を示めし、以て偉人が内部の生命を寫すとの足らざりしは、頗ぶる遺憾とす。故に、第一篇、隆盛が郡方書役となりたる比ろ、及び前後二回遠島に謫居せし比ほひの記事甚はだ簡疎なるは、もとより其材料の得がたかりしに由らんは明らかなれども、亦た之を講究するの熱心稍や他に於けるが如くならざりしに由るにあらずや。こゝに於いてか、此の比類なき隆盛傳も、遂ひに彼れが事業の歷史、即はち彼が外部經歷の記錄として止まんとするの傾向あるは、絕大の恨事ならずや。

左れど、此は、完璧の微瑕を惜しむのみ。此書優に前記の二長所あり、讀者もし左の諸題目に對して此書を思ふとあらば

いよ／＼以て其の價値を知るに足らん。

神采面あたり見るが如し　西郷、藤田東湖を初めて見るの條に云く、

　隆盛は樺山三圓、津田山三郎を伴ない小石川水戸邸に至り初めて東湖に面接したり。隆盛の人に接するや沈默して談笑すると少し。故に其東湖の許に至るも默然として唯東湖、樺山、津田等の談話を傍聽し僅かに初對面の辭禮を爲したるに過ぎざりしが、東湖の色黒く骨格雄偉にして眼光烱々たるを見て心竊かに感ずる所あり、辭して門を出るや樺山を顧りみ笑ふて曰く、東湖は恰かも盜賊の親分を見るが如し。

彼屡ば內顧す憂患常に薩藩にあり　隆盛をして大ひに爲す有るに至らしめたるもの二あり。曰く齊彬公。曰く、薩摩藩これ也。齊彬公死してより、彼が斷えず憂思する所ろは、薩藩の後ろ楯にあり。彼が、京に出でゝ大改革を試みんとするや、常に先づ藩地に返りて其の改革に從事す、前後數回、大抵然り。英雄苦心の跡、歷々徵すべからずや。

究迫の地如何んかするを見よ　齊彬公の未だ死せざる時、彼は何等の後顧なきのみか、万馬千軍の大後援を以て、四方に奔走し、幕府の阿部閣老に說き、公武合躰の事略ぼ成らんとして、阿部先づ死せるの時。彼が一生の大打擊たる齊彬公の死せしとき。水戸の兩田が死せし時。一橋嗣立の事漸やく成らんとして忽まち破れし時。其後、幾度か建設して幾度か破壞さるゝ宛がら賽河原の小供の如くなるとき、彼の天然の大なる小供が、如何に天を怨みず人を咎めずして、忽まち復た蹶起するかを見よ。

情は劣等の禀性にあらず　人の尤とも高等なる美質なり。彼が、齊彬公の死に殉ぜんとし、月照と相抱きて水に投じ、獨り救はれて後ち屡ば自殺せんとし、遂に後ち大ひに決心するの情義。第二謫居地牢獄の警吏土持政照に對する情思纏綿の樣、彼が兵馬倥偬の間、屡ば彼に寄せし無邪氣の書に於て、此の傑士が心裏の情愛を見よ。此書狀の一節に云く、

　其後書狀も不相遣甚以不本意の次第にて、無御立腹の筈と相考候………

第一等の人群才に仰望せらるゝの狀古今相同じ　時非なり事大なるときは、即はち西郷を思ふ。彼が二回謫流せられて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

而して、其の遂に召還懲待せらるゝの時勢と、躰裁とを見よ偉人が爲すとなくして隱るゝは、虎の野に伏すが如し。もし無らんには、之に頓着せじ。之あらん間だは、遂に之を呼出して、其最後の「決」に問はざる可らず。問はずんば、安んせず、問はざれば、氣が濟まざる也。斯の、不安心や、事業に對して不安心なるのみならず、自己に對しても亦不安心なる也。西郷が、大事に臨んで屢ば群才に仰望せらるゝの躰を見よ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・彼が群才に於ける度合ひ尤とも味はふべし　着眼高きと一等時勢に對して偏ぜざる神の如き、彼が靈妙卓拔の識見と、着々、彼に一歩を後るゝ當時の群才が關係は、左の一書の記す所によつて明らかに知らるべし、

當月十一日附之御懇札同廿三日朝相居雖有拜讀仕候實に御馴々敷繰返し卷返し候私斯く罷成候形行は決て不申上考に御座候得共如何樣之御疑惑も難計御安心成兼候事さ無據委細申上候間御一覽後丙丁童子に御與へ可被下候嶋元より相考候よりは雲泥之違ひにて御府內都て割據の勢に相成居頓さ致し樣無之摸樣故暫くの間觀察仕候處當時之形勢少年國柄を弄し候姿にて事々物々無暗な事而已出候に政府は勿論諸官府一同疑惑いたし爲處を不知勢に成立ちヶ樣の事は是で引結び此處で成ろものさいふ事は全く不知志は能く向候ても所置に至て疎く俗人之笑ふ事多く君子の賦に候得共爲す處至て賤數手而已相尋君子の所行に無之候所謂皷忠派さ唱候人々は是迄屈し居候ものゝ伸候て只上氣に相成先つ一口に申せば世の中に醉ひ候鹽梅逆上いたし候模樣にて口に勸王ささへ唱候得ば忠具のものさ心得さらば勸王は當時如何之處に手を付候はゞ勸王に罷成候哉其道筋を問詰候へば譯も分らぬ事にて國家の大躰さへヶ樣之ものさ明めも不出來日本之大躰はこゝさいふ事も全く存知無之幕之形勢も不存諸國之事情も更に辨へ無之そふして天下之事を盡そふさは實に目暗蛇を出すにて仕方もない儀に御座候然處少弟儀順聖公之被召仕候さの趣世間に相響居此ものが歸りたら決て事柄も盡ろふさあてに相成候鹽梅にてもふは□□も打たれ候向に無之是が幸中の不幸に御座候餘り高く直段を付られ込り切りたる事に成立候

泉公御參府に付御大策さ申儀有之是は三四輩之處にて極秘密之事にして有之候由然處着遲小松家へ會し候樣承り大久保同伴參候處中山尙之介參會有之四人會席にて御大策之趣承候處此節は京都迄にて一橋越前御後見御政事御相談役さ申勅御申下しの御事さ承候付委敷承候處頓さ返答さへ出來兼隨分之御大策も取處無之鹽梅に罷成候私より問掛候は右之勅を御下し相成候には手づろさ申もの無之候ては迚も出來不申夫は閣老之處へ委敷申込にてヶ樣に成され候て請合て盡すさ申事能々地盤を居へ不申候ては出來申間敷夫は如何に候哉さ承候得ば全く手は付居不申左樣なら幕府にて甘く御返答申上候て始終勅に不應候はゞ如何の御策相立候哉承候得は其時はいつ迄も京師御滯之賦京師へ一年も二年もさは御滯相成間敷若不應日には違勅之罪を御責不被成候ては名義も相立申間敷又京師御保護に付ては只錦之御屋敷共に被爲在候ては何共知れぬ事所司代を追退井伊之固めを除不申候ては相成間敷違勅之罪如何御正し可被成哉相尋候處一言之返答も出來不申時日を移す內異人さ相結大坂口より軍船を差向候はゞ其時之御手答如何相付候哉一々難論仕掛候處返答さへ出來兼候人に御大策さは餘り氣强く□まり候夫故私を相待候事に御座候間任〻吳候樣承候得共是は私にては迚も出來不申未だ御內評中の儀にも有之候はゞ如何樣共盡し樣有之候得共都て仕くさらかして仕樣さ被申候ても出來不申段返答致し

・・・・・・・・・・・・・・・・・堂々として大義名分を正す偉人の歩む所は大道なり　初めや、公武合躰。次や、大藩連衡。次や、勅によつて幕政改革。次や、征長。次や、藩長連合。次や、武力によつて幕政改革。最後則はち斷然たる決戰に依らんとす。大勢に隨がつて、名分を守り、非常に際して、常を失なはず、其の自然なるや宛然として、水の低きに流れ、竹の堅に割らるゝが如し。而し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、碌々の輩は、つねに眇察す。たゞ勢機に後れて、或ひは急ぎ、或ひは、後れ、或ひは、狂し、或ひは臆する也。死中活を得、人豪の秘訣甚はだ偉麗なり　彼容易すく動かず、動くときは必らず貫ぬく、彼が、伊地知を面責し、永井雅樂を刺さしめんとし、宇和島公の席より退ぞかんとするの意氣を見よ。大事に臨んでは、才畧を用ひず、直ちに赤誠を披ひて、死中に活をさぐる。云く、

自分の身が恐ろしく成ること術を不用候ては致方無之候間、すべて取止候様大事に懸り候ては只だ誠心を以て不盡候ては決て不相成、たとひ仕損じ候ても誠心さへ相立候はゞ感慨して起る人も出來候間、術にては决して不相濟候。

大人は春天地の如し何となく心地よし　其傳を味はふすら既に爽快なり、もし之と席を同ふして相ひ談笑せば、樂味抑も何如ならん。凡そ如此き修德の偉人は、其の傍らに居るすら愉快なるものなり。たとへば春にあふが如し。何となく温たかく、又何となく生氣の湧くとを覺ゆる也。當今の一人才、世上に天物とまで風評されたる某も曰へらく、もし西鄕と同もに居らばコモを冠り居るも愉快なりと。之れ、决して過大の評にあらじ

余は、此傳に於て、少なからぬ益を得、尋常ならぬ愉快を感じたり。著者に謝すると共に、世の讀者に推薦す。

朝鮮懲毖錄を讀む

是れ昔し柳相國が著はす所、近頃ろ、地外生、譯して出版す。一卷、一百四十葉むかし太閤が朝鮮を征せしとき、相國柳氏つれに國王に扈從し、亂後自から之を作つて後人を戒しめたるもの。所謂る懲りて毖しむの意なり。

憫れむべし、當年、身を邦家に許すの志士なきにあらず。初めにして、使臣金誠一の着眼あり。中ごろにして、京畿監司沈岱の慷慨あり。終に至る迄で、李舜臣の嚴正あり。而して、首相柳成龍の如き、一國大臣たるの氣宇識量なきにあらざりしが、其の遂に日本武將に及ばざりしは暫らく言を待たず、明の將軍例によつて怯懦卑劣にてありしかば、遂に屢ば大敗績なきとを得ざりし也。

遼左の勇將と聞えたる祖承訓が平壤に行長等を擊たんとするや、先づ太平樂をうたつて、國人に問ふて曰く、平壤の賊猶ほ在る乎、走り去るとなからんや。曰く、未だ退かず承訓酒を擧て天を仰ぎ祝して曰く、天必らず我をして大功を成さしめよ、祝し終る微笑一番、賊猶ほ在るか、此賊運命拙きか、抑そも又天我をして大功をなさしむるかと。三更軍を發し戰かつて忽まち敗れたり。

李如松、京城の戰に大敗し、神氣大に沮喪し、夜大に痛哭し、軍を東坡に退けんとす。皆之を爭そふ。彼が奏本の草稿に曰く、賊兵都城に在るもの二十餘万、衆寡敵せずと、其末に至りて又言ふ、臣病甚し請ふ他人を以て代らしめよと。

嗚呼、支那の勇將軍たるもの千古不易、大率れ如此し。

○日曜墓參論

基督教主義諸雑誌多かる中に、一種熱誠の奇骨ある「基督教新誌」は、其第五號の紙上に揭題の一論文を載せたり、中に云く

人は此死の顯現なる墓地てふ刺激に逢て勢ひ人生の最大問題に思を走せ宗教心をして高調ならしめざる可らざるに至るべし……故に吾人は切に總ての基督信徒に向つて日曜の墓參を勸告するもの也……終りに墓地管理者に一言せん、願くは各墓地に或は適宜の長椅子を備へ或は樹木を植へ以て是等の士をして沈思默想をなし、神と天然とに近づき、隱れたる「人」に接するに便ならしめよ。

是れ實に赤誠にして卓拔なる着眼なりとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

爛煥

悲哀の美と女性

布川靜淵

われ、私かに思へらく、女性は男性に比較して、悲哀の美を快感すること甚だ少なきものなりと。その何故に然かるかは多少の說明を要す。

◉想ふに女性の美感は、概して狹少なる者の如し。かの「亂峯飛舞海濤呼、萬松奏樂響洞壑」といふ、天地の樂む所あるが如き景色。「黃沙慘澹商飆吹、斜陽蔓草迷秋蝶、古日空林泣子規」といふ、天地の悲しむ所あるが如き天然の美は、女性の多くは快感し得ざる所也。婦人は月光を蹈んで深夜流れに棹さんよりは、庭園を徘徊して草花の咲き亂れたるを眺めんとす。雷おどろ〳〵となりて怒濤逆捲き、劇しき颶風吹きすさみて電光のきらめくを快とはせで、市人雜騷、俗氣紛々たる所、人車に乘りて廻らんとはなす。彼は雨後の月を眺むるよりは爛熳たる櫻花をかざさんとし。夕暮よりは白晝を愛し。秋よりは春をめづ。一瀉千里大河を決する瀑布よりは谷川の細き流れを好み。深山幽谷の間、神清み骨冷ゆる凄まじき所よりは、玩弄戲に用ゆる箱庭を喜び。澎湃たる大洋よりは、さゞ波うね〳〵として細紋を散らすの景を好く。彼は厭世にあらで樂天なり、彼は剛毅果斷活潑にあらで、柔弱溫和、げにやさしく又しとやか也。豪爽雄快は彼の本眞にあらず、悒鬱隱憂を特色とす。細緻鮮麗は彼の最も好む所なるか如し。故に清純の美を享くることを得るも、偉大、勇壯の美は、假設へ享くる者ありとするも、誠に稀有なり。彼は又溫雅の風致を味ふなるべし、然れど悲哀の美を快感すること少なきが如し。

◉悲哀所謂かなしみなる者、悉く美なるにあらず。ハルトマンの說に從へば、悲壯、可憐、餘哀は美にして、悲酸は美にあらず（其の悉しきは同氏審美學二五六頁以下四一一頁に至る諸點を參考すべし）。悲酸とは前程の希望爰に斷絕し、身僅に存らふの時にして、悲哀中の悲哀とも云はんか。彼の地震の爲めに瞬時にして幾百千の人家を倒盡し、老幼男女の悲鳴する狀況は、則ち悲酸にして萬目、凄涼楚愴の景、之を目視するもの、如何に剛膽に勇壯なるものと雖も、悲哀の實情に迫られて以て、快感すること能はず。斯の如き天災は決して吾人が、美と爲し得ざるものなり。何となれば凡そ美を享けんとせば、強大なる實情の意識中に跋扈することなく、之を抽象し脫實することを要すればなり。悲壯とは、之を解除かんとして解除く能はず、之を排斥せんとして排斥し得ざる紛々麻の亂れたるが如き、葛藤混亂に遭遇し、遙遠幾多の希望を達すること能はず、身を殺して空しく黃泉の客となる如きものなり。此種に於ては多くは、確固不拔の道德的要素の脈々として貫通するか、若しくは個人の堅認する信仰と社會の輿論と相衝突して爰に波瀾を生じたる如き塲合ならずんばあらず。可憐とは諸種の情緒混交し來り、彼と此と相鬪ひ最も複雜したる葛藤の生する時なり。世に悲壯なるもの少なしと雖も可憐なるものに至ては、日常見聞する所多しとす。甲乙彼此の情緒亂れて盤根錯節を兩斷し難きこと幾何ぞや。餘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

哀とは時の關係に依るものにして、過ぎ越方の悲しさを顧憶し、而かも身現に生存し、過去に比較して心の安きものあるも、尙憐むべき狀態あらんか、之れ餘哀なり。

以上、悲哀の感の中所謂快きもののあるは、その美なるもの丶みなり。美ならざるものは快感を惹き起すと能はず。而して悲壯可憐餘哀の三者は、其性質上「美」と認むべきものとす。

◉女性は何故に悲哀の美を快感すると少なきか。云はく、女性は實情を起し易きが故に、美假情を形造ると少なし。是れ理由の一なり。抑も美は實物に附着するにあらず、又主觀的理想にもあらず、實物と心情と二者相俟つて其の間に生するものなれは、大凡美を享けんとするものは先つ脫實するを要す。今悲哀の美を享けんとせば、悲哀の事物に同情し憐憫すると共に、之を抽象して實際の情感を過度に起すべからず。悲哀が美とならずして漸々に遠かる程度は、觀者が實情を起すとの熾なるに從ふものなり。さるに女性は悲しむと誠に、深刻にして永久なるが故に、此間、美の假情は意識外に放出せられ、實情のみ意識の舞臺に跋扈す。故に美假情を形造るの餘裕あらざるに至るなり。その悲壯の出來事に遭ふては寧ろ嘆賞と驚愕に過ぎて脫實する餘裕なし。彼は痛く驚き強く傷む、されば實情常に强大にして、假情に勝つなり。之れ悲哀の美を享くると少しとする所以の一なり。

◉女性は概して敎育の程度低きが故に、抽象的の作用鈍き者なり。之れ理由の二なり。美の感は必すしも直覺にのみよるに非ず、知識の如く又道德の如く、日常養成して進歩せしむるを得る者なり。さるに婦人は古來、種々の原因より男子に比較して敎育さるゝと少なく從て、美感も低度にあるなり。試みに婦人中の無敎育者と多少の敎育を受けたる者とを比較せば此般の消息思ひ半ばに過ぎん。抽象脫實は美を享くるに欠くべからざる者、而かも此の欠くべからざる能力は、敎育によりて發達する者なれば、女性が概して悲哀の美を快感すると少なきは彼が固有の實情を起し易き性質に加へて、更らに人爲的原因則ち敎育の低度なるによる者と云ふべし。

◉女性は外美を重んずるの習慣あり故に、實情と假情とを錯誤し易し。之れ理由の三なり。外美を重んずるの習慣は、生物學上の所謂、牝牡淘汰の作用と、社會上の生存競爭等より來れるもの。而して外美を飾ると愈々熾なるを致すは、多くは狹小なる美感に伴ひ、外美によりて內醜を隱蔽し、之を表はさゞらんとするに依る。世辭巧みに色麗はしき、遂には僞善となり易し。爰に於て乎、實情を起すべき時に假情を起し假情を起すべき時に實情を起し、彼此相錯亂して判然區別し難からしむるなり。故に劇塲に於て愁嘆物を演ずるを見るや、彼等は申し合せたらんが如く、さめ〴〵と泣きて紅淚を流す。而かも其愁嘆に同情を表して痛く悲しむ割合に道德上の進步なく、歸途の笑種とし、俳優が或者に扮するを以て彼れの技術に表はれたる如き、人物ならんと想像し、其技術を美假象とせずして俳優其物を慕ふ如き者頗々として多し。

◉女性は感動すると深き割合に、之を現實に行爲するの術に乏し。之れ理由の四なり。知己朋友の不幸に遭へるもの、同

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

族の貧窮に迫るもの、失望落魄殆んと寄べ汀の捨小舟の如き最とも可憐なる出來事あるや、婦人は深く感動し憐憫惻隱の情を起し易し。然るに東西古今の別なく、概して社會の歷史上、婦人は男子に依立するの習慣あり、從て多くは家長なる男主人の權力強く、財產の如きは殆と男子の專有に屬し、婦人の私產なく所謂自由なるもの少し。故を以て彼は感動し易き性あるに拘はらず、之を行爲に發表するヿ能はず。故に此感情は徒らに言語に現はれ、空しく容色に現はるゝに至れり。悲哀の出來事あれば、彼は一時深く感動す。已に感動すれば憐憫の情、內に燃ゆるなり。而かも施すの術なし。故に遂には泣きて自ら遣る。此點に至るまでは、尋常なりと雖も、更に自らを慰めんとて井戸端の會議となり、徒らの語り草とし、茶話となり、遂に「姦」をやかましきと讀ましめ、支那及び中古の我が法令中に「口舌」を離緣の一條中に加へしめたり。蓋し是れ所謂、巧言令色を大ならしむるのみならず、僞德を起すの一因なり。而して悲哀の出來事に遭ふも、實情を起すべき時に、世辭をもて瞞着するの弊を生ぜり。世の婦人社會を見よ、可憐の救ふべきを感するものありと雖も、敢て之を救ふヿの少なきは事實にあらずや。悲哀の美は單に悲哀の美を感じて快感あるにあらず、敢て之を救ふ底の能力あり且つ、自ら之に堪ゆるの念なくんば、享美するヿ能はざる者也。

◉女性の境遇は變化少なし、從て執着心強く保守性なり。之れ理由の五なり。境遇の變化するヿ多ければ、出逢ふ所の事物複雜にして心情の變換作用を能くするものなり。女性や殆んと室內に生涯を送るもの、從て變化少なきが故に、凡そ故耳といひ、進步といふものは大概男子の手に成り來れり。夫れ悲哀の家庭に生ずるや悲壯もあらん又可憐もあらん更に餘哀もあらん。然れども之れ多くは家庭中の出來事なり。されば前述せる理由の外、此には境遇上より悲哀といふヿを多くは、他と對照して感せざるなり。假設對照して感するとするも、多くは可憐と餘哀なり。而かも其餘哀の如きも俗に所謂取り越し苦勞に屬する者多し。無敎育のものに至ては餘哀の美を感するヿすら少なからん。而して未婚年少の婦人は多くは樂天的にして、形而上的思辨を味ふるヿ能はざるが爲め、年少男子の厭世詩家の如きものは、殆んと之れなきが如し。既婚して子女を失ふ如きヿあらんか、執着心深きが故に男子に比して、悲哀を感すること多しと雖も、此時や餘哀の、快感あるべし。蓋し自ら悲んで自ら遣り、過去を憶ひ出すヿは一の快感となればなり。斯く境遇の變化少なきが故に、大小の悲哀の實事を對照するヿ少なし、故に小說に耽り芝居に遊び自ら遣らんとす。小說や演劇や多くは裝飾的のものなり。彼等は之を悟らずして想と實とを混合すること甚だしきを致し、遂に世に養ひ難きものゝ數に列せられたりき。

◉女性の美感の狹少なるヿは、種々の點より證明するヿを得べし。爰に一二の俳句を擧げて其一斑を示さんか。

我邦女性の詩人たりしもの、則ち詩的思想を有せるもの甚だ多し曰く捨女、曰く秋色、曰く智月、曰く千代、曰く園、其他古今東西、其例枚擧するの遑あらす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

捨女の句に、栗の穂やみはかずならぬをみなへし。うき中に馴てゆき間の嫁菜かな。秋色の句に、獨り居やしかみ火鉢も夜半の伽。翠簾さげて誰妻ならん涼舟。智月の句に、鶯に手元やすむる流しもと。我形も哀に見ゆる枯野かな。千代の句に、蜻蛉つり今日は何處まで行つたやら。起てみつ寐て見つ蚊帳のひろさかな。朝貌や地に咲くことをあぶながり。園女の句に、負た子に髮なぶらるゝ暑かな。手をのべて折ゆく春の草木かな。是等の二三の句は以て全斑を推測するに足らずと雖も、彼等の詩想の狹少なるは、其句集を繙きて明か也。

其角の、稻妻や昨日は東今日は西。聲かれて猿の齒白し峯の月。水うてや蟬も雀もぬるゝほど。等の感は女性に於て見ること難し。女性の詩題には、可憐、餘哀の美感を包含するも、悲壯、偉大、莊嚴等の美感少なしと云ふも不可なきを信ず。

◉喜怒哀樂の情を心理學上より説明するときは、抽象的に組織するが故に、古今東西、相異ならざるものなり。然るを社會學、審美學的に「何を悲み」「何如に悲み」「何時如何なる悲しみをなすか」等に就きて觀念に色彩を附して、具象的に察する時は、悲哀は一種の大現象にして、時世と共に變化するを見るべし。軍國の妻は夫の討死を聞くもめゝしき哀憐をなさで、覺悟よろしきを得。貴族的社會に於ては、秋の月の村雲に掩はれたるを見、又は鹿の鳴く聲を未だ聞かさるに哀れを感じ、情濃かにしてやさしき情けあり。內治外交頻繁にして國家の元氣振作するときは悲哀の感、概して少なく、經濟上の關係複雜なるに從て悲哀の感薄らぐことあり。又世界を哀觀する宗敎を固信して主觀的に悲哀を養成することあり。例へば佛敎の我國民に影響したるが如し。されば吾人が悲哀に就て、實情を起し易きも大に外界境遇の影響による者あるを知るべし。

◉女性が悲哀の美を快感することは、獎勵すべく將た養成し得べき者なるや否や。曰く適宜に獎勵し又養成し得べき者也。女性の美感には前述せる如き特色ありと雖も、美感を多くするは快感を增加する者、且つや婦人社會は概して、めゝしき哀憐と涙脆ろき痴情とに陷る者なるが故に、大に家庭の和樂を害す。故に獎勵し又養成せさるべからず。唯之れが爲に殘忍を好み德義の衰頽することなきを要する耳。如何にして養成すべきか曰く、敎育上、社會に關する知識と審美に關する情緒を啓發するの方法を取るにあり。社會に關する觀念の養成に於て、人生の苦樂、人生の目的、國民精神の特質、其社會と外界との關係其進退する所以を辨せしめば、所謂平和の時代にありて戰國を忘却することなからしむ。從て人生社會を達觀するに至るものなれば、めゝしく涙脆ろき徒らの柔弱を去り、空しく悲哀に對して僞善をのみ運ぶことなきに至るべし。又審美の情を養成すれば、實情と假情と實象と假象とを區別し、美を享くること多く漸々天然美及び人生社會の悲劇に對して、女性固有の實情を起し易き性と共に、美假情を形造ることを得るに至るべし。故に高等の女子敎育上には、社會學と審美學とを適宜に敎授するを要す。夫れ男女を問はず、眞善美に對する能力の資質は、毫末も異なる者に非ずして、唯其度量に差別ある所以を認識せば余輩の言敢て不當ならざるを知るべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

糸ぐるま

空花

葉末にむすぶ　星の影
虫のなくれも　露けきを、
いつまで歌は　ひゞくらむ、
いつまで哀れ　うたふらむ。

曉ちかき　雲きりに
名殘の夢を　つゝまれて
覺むればあはれ　今朝（けさ）もまた
妙へなる歌ぞ　きこゆなる。

朝な夕なに　くろ〳〵さ
たゆたひもせで　くろ〳〵さ
かはらぬ調子（しらべ）　うたひつゝ
めぐるぞ　あはれ
糸車。

竹のまがきに　つた葛
おひたきまゝに　よぢのぼり
見るもいぶせき　柴の門を
いでゝぞ歌は　ひゞきける。

榮えも富みも　うき雲さ
みすてたりけむ　賤が屋の
窓の戸よりぞ　歌はしも
風のまに〳〵　ひゞきける。

朝な夕なに　くろ〳〵さ
たゆたひもせで　くろ〳〵さ
かはらぬ調子（しらべ）　うたひつゝ
めぐるぞ　あはれ
糸車。

うき世のちりを　よそにして
車さゝもに　天地の
しらべ歌ふは　たれならむ
たえせすうたふ　人はしも。

嵯峨野の月に　箏の音の
むかしを忍ぶ　みやび雄も
かゝろしらべは　きかざらむ、
かゝろ人さは　しらざらむ。

あはれゆかしき　その歌は
うき世のものさ　きかれけり、
あはれたえせぬ　そのおさは
惡（にく）きひゞきさ　きかれけり。

朝な夕なに　くろ〳〵さ
たゆたひもせで　くろ〳〵さ
變らぬ調子　うたひつゝ
めぐるぞ　あはれ
糸車。

『媼（おうな）いかに』さ　おさなへば
かなしきゑみを　もらしつゝ、
『かばかり强く』さ　答へけり、
くろまさ共に　うたふごさ。

貧さなやみに　うつろひて
やつれはてたゝろ　其姿、
いづこに强さ　こもろらむ、
眼のいろも　ありやなし。

『人をしみれば　むら〳〵さ
つきせぬ思　わきいでゝ
わが背（せ）のいにし　そのよべの
戀しき歌ぞ　しのばるゝ。

海よりふかく　蜜よりも
甘き情けを　さゝげてし
この世のひさは　あらざろか、
汝が身のこして　うせにしか。

『あはれさ君も　おもへかし

忘れ片身と　朝夕の
風のこゝちも　あだにせず
愛(め)でし吾子は　あはれ子は。

老路に母を　うちすてゝ
いづこに幸を　たづぬらむ、
世になき父の　跡(あと)をひて
夜見の客とや　なりぬらむ。

『あはれ吾子は　あだし女の
露のなさけに　さそはれて
行(ゆく)へさだめぬ　旅けぶり
いづこの空に　まよふらむ。

あらしふく日も　雨のよも
變はらぬ愛を　よそにして
などその母を　見すてけむ、
あはれ汝が身の　母なるに。

『みぎわたゞよふ　捨小舟
望(のぞみ)もさちも　つきたれど
思ひの糸は　たえざれば
いつさはなしに　うたひつゝ。

かくてきえゆく　年月も
よみの使ひと　おもひては
ながらふ甲斐も　あらざらむ
あはれうたての　そのさまや、

朝な夕なに　くるくると
たゆたひもせで　くるくると
かはらぬ調子　うたひつゝ
めぐるぞ　あはれ
　　糸車。

垣根のすみれ　いくたびか
さきてはまたも　うつろひぬ、
うつろふ草を　ふみわけて
かへりきたりし　人ありき。

面はやつれて　みえたれど
兵士の姿　いさましく
胸にかざせる　勳章は
日影にいよゝ　てりそひぬ。

昔しながらの　柴の門を
くゞりて家に　いりにしが
いかになしけむ　蜘蛛の糸の
窓をさざして　十(と)重(え)二(は)十(た)重(え)。

『母よなが見は　かへりぬ』と
よべどさけべど　あはれはれ
答ふるものは　あらざりき、
迎ふるものも　あらざりき。

よくよくみれば　ほのくらき
部屋のもなかに　糸ぐるま
なにも言はずに　たゞひとり
塵にうもれて　のこりけり。

さしも奇(くす)しく　うたひたる
昔しのさまに　かはられど
なにもいはずに　たゞひとり
さびしき宿に　のこりけり。

朝な夕なに　くるくると
たゆたひもせで　くるくると
歌ひおへにし　いさ車
あはれこの家の　糸ぐるま。

吾人の格調何ぞ常に悲しき耶、悲哀は吾人の眞狀なる歟、詩の昧嘗さは涙嘗のとなる歟、吾れ之を知らざる也。アヽ吾人如何なれば、糸車のめぐる所いづこにても人生の悲歌を聞かざるを得ざる歟、筆を擱て慨歎久之。

月を傷む

白衣子

天空　蔭ふして　漠々たり
光　深くこめて　色　遠く描く
暮色　何ぞ朦朧　徜徉　東天を望む
圓々たる　圓盤　小兒　手を擧げて走る。

月の乙女子　横雲に腰打ち掛けて
堅き蕾の紅　未だ綻びやらず
天の底に在りて　徒脩　那邊に行かんとする
無邪氣に笑める姿は　なにか　瀆さん。

空澄みて　嬋娟　氣　暖に匂ふ
花の心　一面に流れて　氛氳　飄々
二八の芳期　艷の波　ゆらぎそめ
何を羞ぢてか　緩袖　玉容を掩ふ。

そよ吹く風　雲も　姿優に
婀娜たる　綾羅は　ゆるく芳を流す
愛の塊を　めでたく　草葉にぬきて
靈の惠み　ゆたけく　下界も生くなり。

楓の色を　面にそめて　まばゆく

春の音信　靜かに　幽蘭の香を送る
流光洽ねく　六合に徘徊して
皎さして　寶盤　美の生命充つ。

情なや　嵐　恨み　何の無常
其靜けさを　何の心ありて　此風
白雲矢を射て　むらがり　飛びぞ驅る
大空ゆれて　果た　何の光景

やさしき胸　動きそめて　そわく
葉末の露　はらく　乙女の瞼
蕾きてし　天つ御園　愛の園
隔てられて　今は　冬の木枯。

浮世　無慘　いづこより此春をふらす
黒雲すさまじく　亂髮　おどろく
千筋の繩をかけて　いかに　遁れん
罪なきものに　惡魔　强く當る。

柳の姿　靡けども　心　雪に折れず
蛾の眉　皺めども　靈　涙に溺れず
はやれ　果敢な　暗み　月を呑みぬ
暴風すさみて　若葉　ついに堪えず。

美人離れて　此良夜　亡び失せぬ
冥々として　闇く　慈心　切怛たり
遥かに天をながむ　求むる所なし
涙涸れ　血盡きて　氷　寒し。

時　移りて　世界　寂靜まりぬ
十方　聲絶えて　落莫　寂寥
名劍の肌　研ぎすましたる　青寥
拭ひ去て　清淨　世のものならず。

中天高く掛く　冷々　素白の月
遠く人間を放れて　姿　色なし
眼透　流波起らず　頰上　紅花咲かず
玉唇時に動きて　聲　澄み渡る。

あゝ　乙女……月の乙女子
空しく貞亮の潔清を抱く
浮世の風は　汝を　亡ぼし終らず
されど　汝が愛の火を　吹き消し終んぬ
洒々たる　其風姿は………
千斛の涙　が　生める　孤兒！。

博物館を觀るの記（二）ノ上

無　光

余は前回に於て維新來よりの繪畫界の內幕を白狀せり。言頗る嘲笑的の意味を帶びざるに非ず、無責任に似たる觀なきにしも非ず、然れども余は最も謹直に、最も眞面目に深く彼等の事實を察し、內情を度り得て、僅かに心に信ずる處ありて是等の言を呈せるものなり。余にして若し、現在の有樣を以て批評の標準をなせしならば、彼等を以て最も進步したる美術家と許せしならん、惜い哉、余は唯美神の前に膝つくを知りて、徒らに現在界を崇拜するを知らざるなり。余は今日の繪畫社會をして非常の自省を來し、深く覺る所ありて、暗を去り明に赴き、卑を捨て高きに赴かしめむと欲するものにてあるなり。

維新前の古疵を持出して爰に暴露するは、頗る事理を解せざるに似たりと雖も、其古疵の古疵に非ずして、今も猶ほ切に肺肝に食ひ込み居るを如何にせんや。よしやよし、彼種の繪畫は彼の種の繪畫として社會の片隅に生存するも、其價値だけに與へられてあらんには然かく嘆ずべきにも非ず、又左程露摘すべきにも非ずと雖も、今日此種のもの、繪畫の全權を握り居るを如何にせん。其處を得なば卑きものは卑きものにて宜きなり、然れども其在る可らざる地位に在るを如何にせん。若し彼の如き弊風にして社會の下層にのみ在らんには、若し此種の畫家にして一種の風流的玩弄物として、封建時代の遺見として在らんには、若し彼等にして自から世界の美術家などいふの慢心を起さず、日本美術の先達などいふの虛誇をも抱かずしてあらんには、若し彼等にして謹直に、謙遜に己の出來得る力を施しつゝあらんには余は稱讚の聲を揚げ、雙手を擧けて彼等を迎へんと欲するなり。余は最も日本畫を好むものゝ一人なり、余は人の前に日本畫の美を誇りつゝあるものなり、今日の畫家が有する手練は頗る注意すべきものあるを認め居る者なり。余豈に言を好むものならんや、只彼等の其分を超へて境界外に濶步するを慨するものなり。

毛筆の運用に於て、日本人は僅かに非常の妙技を顯はしたり、日本人特有の機敏にして優美なる天性は、外觀甚だ不便らしき此毛筆を畫幀上に運用して驚く可き巧緻を恣にし、趣味を含ましたり（此點に於ては支那人よりも遙かに勝れり）。殊に百年來の進步は實に著しき効果を顯はせり。一本の毛筆、其變化自在なること測る可らざるものあるなり。飄忽として疾風起り、潺湲として小流滑る。娟佳絹糸の如く舒び、粗剛繩綱の如く張る。或は蓊鬱として綠翠滴るが如く、或は索莫として枯木寒烏の趣を現ぜり。鏗鏘金石堅く、荏苒綿糸柔かなに、一線、一點、一畫、一揮毫の間に於て萬種の形容を摸せり。其單純なる彩色を用ゐて、目測る可らず口言ふ可らざる妙彩を染むるに至るは、佐保姫の紫霞の霧絹も、龍田姫の紅葉の錦繡も恥ぢて色なからんとし、雨を帶べる海棠の優美も艶を誇る牡丹の國色も面を伏して香を收めんとす。同じく朱なり、同じく群靑なり、胡粉なり、綠靑なり、其間に存す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る手加減の妙は瀟洒、輕輭、輝々、妖冶、彼の重苦しき油畫の到底及ぶ所にあらざるなり。悠々たる水墨山水、雲油然として起り、雨霏々として降る、崔平たる山岳、平平たる田野一筆兩筆の間に髣髴として、酌む可らざるの靈泉を深く奧底に湛ゆるか如きに至ては、彼彫工が一柄の小刀、善く木質に應じて巧に手練を逞ふすると實に一對の絕技たり。余は常に其技術の運作に敬服し居るなり、彼等に依りて余は多くの事を敎へられ居るなり、余は此等の畫によりて、如何に多く余が一部の美術の感念を養ひたることよ。余は彼等は彼等として益其技量を顯はさんことを切に希望しつゝあるなり。余は此點に於ては、實に以て世界に誇らんとするものなり（彼等と共に）。然れども彼等を以て世界の美術家として世に紹介せんとは到底思ふ能はざるなり。彼等は美術中一部の技術家にてあるなり。

若夫れ彼の巷閭の寄席に於て衆俗の心膽を奪ふ淨瑠璃藝人を取て、是は音曲家なりと誇稱せば、誰か其妄に驚かざるものあらんや。若くは又彼謠曲師を取て、是は是れ音曲家の最も高尙なるものなりといはゞ誰か其愚を笑はざらんや。若くは彼柔弱なる御姬樣の好侶伴たる琴曲を以て、進步したる世界の音樂なりといふものあらば、誰か其不見識を嘲らざらんや。若しくは又彼の雅樂を以て、是は君子の樂なり音樂は宜しく此の如く嚴肅にして古雅單純なるべしと大言するものあらば誰か其古代人民的なるに噴飯せざらんや。歷史的に、盲目的に、今日迄保存せるものを以て、譯も無く大げさなる名詞を與ふるほど愚かに見ゆるものはあらず。義太夫は義太夫、琴曲は琴曲、謠曲、雅樂は謠曲、雅樂にて何の不可なる事かあらん。彼等は彼等だけにて誠に賞すべきなり。畫を畫く故に繪畫なり、面白みある故に美術なり、日本は他邦の有せざる繪畫と美術思想を有せり、故に日本は世界に最も勝れたる美術國なりといふは何處にかゝる論法のあるやを知らず。知らず其畫は如何なる畫なりや、知らず其面白みは如何なる面白みなりや、知らず他邦には如何なる畫ありや、知らず他邦には如何なる面白みありや、此等の點を考へずして、妄りに獨角力を誇るに至ては、如何で彼中華人と誹を異にするを得んや。

觀るべき眼を有てる者にして、今此畫室内に陳列せられたる諸大家の作を一見しなば、容易に其眞を察するを得べきなり。諸氏が繪畫といふものに對して抱ける感念は、寸毫の停滞なく畫面上之に流布せられてあるなり。讀者にして許さんには、余をして充分に余か所見を舒べしめよ。

第一に余がいぶかしさに堪へざるものは、何故に諸氏は其晴れの戰塲に於て一番不馴なるものを畫かれしやといふ事なり余は是迄諸種の展覽會及其他に於て、諸氏の畫かれたる數多の畫を見て能く知り居れり。二尺巾若くは一尺五六寸巾位の絹素に、少なくて半日多くて二日位の工夫を費やされたるものは誠に其筆彩の滯らずして面白み有るを見たり。然るを此度の畫に限りて、無暗に友禪染の如く染め出して譯も無く全幅を塡め、幾度も〳〵隈などを重ねて活氣を失ひ、摸糊とし

て夢の如く板刻なること百片掛の木版摺の如きは何ぞや。是れ恐くは(余か想像に依れば)外國輸出を盛にせんとの志望より西洋人の氣に入るやう當て嵌めんとする、政府の無學なる方略に取り籠められて、偏へに自己を忘れられたるが爲めにてはなきか。純粋に自箇の技量を海外に迄も廣げんと思はるるならば、眞實に得意なる繪畫を出品せらるべき筈なり。

今日政府美術員が日本繪畫を奬勵する所以は、美術上の眞理として日本畫の特長を讃美するといふよりは、寧ろ外國といふ相手ありて幾分か日本の供給を望み居るものあるに應ぜんとするものに非るかを疑ふ(彼等が從來公言する處及び其處置せる事跡を察するに)(口實上は兎もあれ角もあれ)。若し果して然る分子の潜まり居らんには、彼等は似而非なる日本美術保護者といはざる可らず。口に國粋保存を揚言すと雖も、實は西洋人の追從の言葉に浮かされ或は好奇心强き西洋人の賞讃を盲信したるにて、其爲す處多くは西洋人を當てにせる仕事なれば、やはり外國崇拜者の御仲間なり。眞の美術は斯の如くにして發達すべしとは思はれず。一己人に於けるが如く一國に於ても、美術は宜しく政略的、商賣的社會より超然として、社會と美神との間の紹介者となるの謹嚴眞率なる覺悟無かる可らず。政府美術員は一國の保護者として最も此點に注意し政治家に類似せる野心を去り貿易商の如き欲望を捨てゝ、眞正に有力なる美術家を養成し奬勵せんことを務めざる可らざるなり。日本畫を奬勵して將來の面目を一新せんと勉勵する其外形は同じくとも、其内部の目的思想にして異ならば、結果に至て顯はるゝ處當に月鼈の差のみならんや。余は政府が大に日本畫を奬勵するを喜ぶなり(然れども是と倶に西洋畫をも奬勵せんことを望む)唯今日の如き方針を取て永く進みなば日本の美術は遂に淺瀬に乘り上げて空しく廢頽に傾かんことを懼るゝなり。余は余が眞心より涙を揮て、政府に忠告せんと欲するものなり、嗟乎。

畫家は政府の命令を奉じて唯々諾々すべきために生れ來れるには非るなり、何ぞ下役人の長官に於けるが如く、首を垂れて其頤使に従ふことを是れ爲すや。且つ今日政府の美術保護者は素より素人の集合にして、少しは畫術の事も、美學とか、美術史とか聞き覺え居らるゝ方々もあるべけれど、其實際に鈍きこと到底諸氏に忠告すべき力あるにも非るなり。

◎◎次に最も言はさる可らざる事あり。そは此の如き大畫幅に此の如き密畫を畫かんことは、既に根底に於て自然の理に負き居ることなり。

(一)水彩畫は濃姿彩色何れも力弱くして、倒底緻密なる大畫を作るに堪ゆる能はざることなり。故に西洋にても水彩畫は最大のものにても二尺より外に出でず(「フレスコ」は水彩には相異なきも、いはゞ油畫と同性質なり)濃厚なるものと大作とは凡て油畫に其地歩を讓りたり。是れ自然の原則にして動かす可らざることは誰にも分るべきなり。(精密に舒ぶれは餘り長くなる故爰には略す)諸氏がかようの大物を試みられんは始より失敗するに極り居りしなり。日本畫の先祖は此の理を覺りたりと見えて、大作には細部を略して大體を畫き、出來得る丈の濃墨を用ひて、一方には成るべく素地を多くし、線を太くし、彩色を強くして釣合を取れり。(かくすれば何も悪しきことは無けれど、極めて粗畫にして形は大なりともやはり小作なり、故に日本に是れ迄眞の大作なるもの無きなり、(粧飾畫は別問題なりと知れ)。

(二)畫を觀るには、少なくも其大さの二倍の距離の地に立たざる可らず。(是も事新らしく言ふ迄も無き事なれど、諸氏が餘り無學なるを如何せん)。譬へば三尺大の畫ならば二尺か三

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

尺位の處にては全躰の勢を見ること能はず、是非五六尺以上の處より見渡さゝれば畫の趣を知るを得ざるなり。諸氏は第一の原則を破りたるのみか、第二の原則にも全然不注意なりしなり、諸氏の畫を見るに、筆彩の密なること殆んど一尺以内の處にてだに老人などは困る位なり、其六尺以上もあらん大畫をシカゴ博覽會の廣大なる畫室に高く揭げたる時は、丸で夢の如かりしならんと想像せらる、諸氏の折角の丹靑の却て害となれるは甚だ悲む可き事なり。

故に諸氏が出來るだけの大作として、充分の技量を顯はし得る程度は、(余が考より又經驗上よりするに)四尺位の大さにして、或る部分は隨分の細筆を用ゆるにもせよ、或部分には巾一二分位の線を用ゐ、畫の面積の半分位は素地にして、一部に出來得るたけの濃墨或濃彩色を用ゐ、間色は程能く其間に配合し、隈も或部分は極めて綺麗に塗りて、或部分は大刷毛にて一掃し去る如き非常手段を施し、物は餘りゴタ〳〵書かぬやうにして、出來るだけ全躰の變化を强くしたらんにはそれはそれにて立派なる畫となることを得べし、これとても程能き距離に置きて眺めなば極めて淡薄なる畫となるべし、(従來の極彩色に六尺大にして濃厚なるものあれど、そは全躰濃なればやはり弱くして一丈も離ぬれば模糊として觀る可らず)若し如何にしても大なるものを畫かんとならば先祖に倣ふて粗畫を畫くより外なく、然らざれは油畫具を用ゐざる可らず。

とは諸氏が無經驗なる仕事に取り懸りて失敗したる點を擧げたるにて、假令諸氏が在來の日本畫工として充分の技術を有せらるゝにもせよ免れ得ざる所にてあるなり。是よりは諸氏本分の技術の上に付て意見を述べんとす。

李鴻章

井上次郎

久しく支那に在りて彼と親しく、グラント將軍に從がふて彼と會見し彌よ親しくなりしジョン、ラッセル、ヤング氏、近頃、李鴻章の評傳をつくりて云く、

◎世界の四人傑　グラント將軍の亞細亞洲より還るや、余に謂へらく、此行、世界の偉人四者を見たり、ビスマーク、ビーコンスフヒールド、ガムベッタ、及び李鴻章是也。あらゆる事情を參酌して之を思へば、このうち尤も大なるものは李鴻章ならんと。余は當時ひそかに此評に服すると能はず、將軍は寧ろ南北戰爭の着眼より看下するとなからずやと疑がひき。

◎彼が風采　李鴻章、果して將軍の知に相應はしきかは、歷史能く之を證す。されど、要するに彼は現世紀の著名者の一人たるに相違なき也。一千八百七十九年余が初めて彼を見たる時は、恰かも活氣滿潮の折とて、風采堂々丈高くして武人の態あり、而して眼光の煤めく所に、微しく詩人の眼ざしを添えたる、やゝ愛嬌ありき。多く外國人と交はりたるの故なるか、東方政治家に普く見る臆面なし。西洋風に手を握り、別るゝとき他の腕に手をかけて媚撫するなど、頗ぶる慣れたるもの也。聞く所によれば、勃然激怒して打擲蹴投爲さゞるなく、宛がらフレデリッキ大王の父がベルリン宮中に捲き起せし殺風景を演ずると間まありと云へど、余は一回も此態を見たるとなし。余が見たる所は、つねに鄭重尊大にして、好んで樣々の事を質問し、偶ま西國に對する嘲笑輕侮の風を示すとある耳。

◎好談手　極めて談話を好み、談話、細話に入り細談、世評に及び、外國の風俗を聞き、リンコルン、グラント其他著名の人々が逸事を聞くを好み、曾ては、漢文に譯せしエートンの万國公法を余に示し、亞米利加に於て、黑人は支那人よりも多くの特權を有すべしと論じたる箇處の何處なるやを指示せよと求めたり、此は、當時余が辯じつゝありし或る要求に對するを反擊として、暗に此の返報を爲したりと見ゆ。彼が眞實の心は、支那人の移住問題に左して掛念するとなし、通常アメリカ人が下カリフホーニアに於ける土掘り印度人の事を掛念すると左して異なるとなし。故に余が何くわぬ顏にて此處にて候と指示せしときは、彼は高笑して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

止めたり。輿論炎々移住問題に付きて余が彼と語りたるは、たゞ此時の一回なりとす。彼は此の問題を「英國の貿易問題」と稱し、毫も顧慮する所なきが如し。

◎居常一斑　李鴻章が禮儀に盡すや猶ほ王侯の如し。其好意を表するの方法を思慮するや周密にして、一と度び他が所望する所を察すれば、直ちに之を供ふること太はだ大マカなり。領事館の貴婦人を歡待せんとて、五十哩外に小蒸滊船を送るとすらある也。其の勤勉は驚くべし。何事にも關係せざることなし。又、北京より天津に通ずる電信は、何ものゝ私用たるに係はらず、總へて何の氣もなく披見す。もし其意味不分明なるときは、受取人に對して無遠慮に其意味を問ふとすらある也。曾て英國の公使は、其家族に不幸ありたるとき、李鴻章より悔みの使來りたるによつて先づ此の不幸を知りしが、之に後れて訃音の電信到來せしとぞ。これ其配達方、李鴻章の手に滯りて延引せしなり。李鴻章が、内外の電信を私覽するを如此なるに乘じ、諸國の公使は之を反用するとありと風聞す。即はち國際談判危急となるや、一方の軍局より、其部將に對し、わざ〳〵天津電信局を通ふして、事局切迫警戒せよとの軍令を電信する也。左るときは、談判忽まちにして、捗どる也。

◎彼が迷信　李鴻章は依然たる支那人にて、其同族に在ふれたる迷信より免かれぬにや、甚だ蛇を尊信するよしの評判、一時外交社會に傳播せしとあり。左れど、余は、ナポレオン、クロムウエルなどに關する迷信の評判を支那人が解釋すると同一の關係をもて之を見んとす。凡そ此種の人物には兎角此類のとのありがちに記載せらるゝもの也。李鴻章が其邦人の迷信を退ぞけぬは、亦それ大人物の淡純なる所ろか。

◎其の對外思想　純然たる支那人としての性格は、之を西方國民の心に明らかに識認せしむると難し。蓋し其の仲間よりは遙かに超越したる學識ありながら、吾等外人よりして之を見れば眞とに無學にひとし。彼の知れる英語は極々少數なり。此極少數の英語を子供がクリスマスおもちやを弄そぶ如く、恥かし氣に、可笑しげに談話する也。彼は、自國の言語の外、何國の言語をも親しく用ゆるとなし。英語と云ひ、佛語と云ふが如き野蠻人の言語を用ゆるは、其品格を落すことなりと思へり。もとより彼は禮の爲に、かく打あけて言ふとはなかるべけれど、斯く思ふとは其眞實の內心なり。彼は、西洋諸國が支那に對して、爲せし所業を忿怒し、英國が亞片戰爭に於ける、日本が臺灣攻擊に於ける、ロシアが北方領地の奪略に於ける、フランスが東京の侵入に於ける等を列擧するときは、激語乃ち禁じ難きの狀あり。支那は、外國に於て、一の友國なしと言へり。彼が眞に平和を愛するによつて、反つて支那は害せられたりと思へり。彼は、宣敎師に對して鷹揚たり、何も頓着するとなし。宣敎師問題に關して嚴肅なる談話を試みんとするも、彼は之に乘るとなし。其狀、宛から大地主が乞食小作に對する如し。自家の鷄雛にても奪はぬうちは構はぬと云ふの爲躰なり。然れど、宣敎醫に對しては、深く注意する如し、彼が仕遂げし改革の一つは、西洋醫術を輸入せしとならん。一日、彼、余に言へらく、もしも宣敎師にして支那人の心に入るとありとせば、其戶を開くものは、即はち宣敎醫ならんと。蓋し、異邦民の幸福の爲めに、はる〴〵洋海を横ぎり、辛苦艱難に耐ゆるとを天職となす一團の男女此世にあるとなどは、支那人の智識、就中、李鴻章ほどの智識にてすら、承知するを能はぬ所ろならん。蓋しかゝる仁惠には、其後ちの目的なかる可らずと思惟するなり。彼は、福音と劍とを連想し、大道街衢に立つてクリストを宣傳する熱執の人々は、即はち亦た太沽を砲擊し、亞片を强ひて輸入するの人々なりと斷定するが如し。余は、此の觀察を、全く途方もなきものとは言ふを能はず。これ實に不幸なる事情の一致なりし也。バイブルの信仰には劍の血を添ふと實際彼をして思はしめたる所のものある也。

◎亞片　李鴻章が殊に痛心する所は亞片也。これ實に支那のノロヒなり。其最貧の民は、之が爲めに、奴隸よりも惡しき狀態に陷いりつゝあり。此は、英國が其の歲入をもつて印度を支配せんとの所望より强ひて賣付らるゝもの也。信じがたきほどの利益にて政府の一手にて賣付け、每年數百万ルピーの收入を爲す。支那は、絹を賣つて得るよりは更に多くを此の亞片によりて失なふ也。余は、一日、支那に於て罌粟の收穫が追々增加するを彼に語り、國內に於て更に害毒の蔓延せんとするを忠告せしに、彼は、印度よりの輸入を防ぎ得るほどに內國產の增加せんとを望み、而して、其後、王令によりて一朝、其耕植を全禁し忽ちにして罌粟地を米麥の地に變へんと欲する旨を答へたり。

◎彼と事務の交捗　李鴻章と事務の交捗を爲すは容易の事にあらず。されど彼は確かに所言を實行するの人物なり。たゞ人と談判するや、たゞ初めに繰返し〳〵吟

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

昧し、仔細に穿鑿し、些少の誤謬ありて直ちに發見す。故に十分の用意せずしては彼に談しかけがたし。彼は、何事にても既定の事として承認することなし。「保證」「瞭解」など云ふことは、彼に取りて効能なし。又、阿諛、恐嚇も無益なり。各國の狀勢を能く承知し、英國にて、グラッドストン又はサリスベリーの起伏は何等の關係を生ずるか、合衆國にて、共和黨、民主黨の勝敗は何等の勢力消長を意味するか等の事情は悉く承知せり。又、他をあやつるの術に巧みにして、何時、甲國の全權大使に微笑を呈し、何如に乙國の辨理公使に眉を蹙かせば、其の影響如何になるかの係り合ひを好く承知せり。獨逸と佛蘭西との關係、ロシアと英國との猜忌などは、之を利用することに毫も遺算なし。凡そ李鴻章と事件を談判するとき、其の用心疑察大率ね如斯なれども、若し既に彼と十分の瞭解を遂げ、事情明白となれば、万事成れり、彼はもはや疑ふことなし。

◎外國人との交情　外國はすべて李鴻章の好かざる所也。何如なる國にも好感情を呈することなし。もし外國人中にて、其の好情を寄せしものありとせば、そは只だゴルドンとグラントのみなりしならん。他の一般の外國人に對するときは、宛がら帳場の後ろに立つて之と談判するが如し、其事務は只だ有利の交益を爲すに過ぎざる躰なり。汝は汝の目的を達せんが爲めに來れり、吾は支那の爲に其用を爲すべしと請はんが如し。彼は、論より事實を大切とし、一と度び事實の證據あらば、之に隨がつて論理、忍耐を結末迄で押通すなり。此の一事、余が支那にて會見せし他の政治家と異なる所にして、即はち亦李鴻章が久しく其の權力を維持するの所以ならん。

抑も支那に於ける外國人に對して李鴻章が嘗て自から好で爲したる好遇は、常に好き返報をうけたることなし。此を以て彼は此の好遇を中止したり。或る時余は彼が上海に赴むきたる折同伴せしに當時、外國人が彼に對する仕打を見るに、何如にも無頓着のみか、書に輕侮の狀あり。たゞ一二軒に招かれしとき、一日午後あるクラブを見舞ひてラウンテニスの遊びを見しこととの外には、毫も接交することなかりし也。蓋し東洋に於ける外國商人は、たゞ商業上の代人として待遇する外に、かつて支那人を重視することなきなり。パーリス氏は、上海にある英國人が、李鴻章をして彼の地位政畧に相應わしきほどの注意を惹き起さしむることを得ざりしを憾みとせり。惟ふに之が爲めに何如なる深き政畧を爲したるかは知らずと雖ども、蓋し、東洋人に對しては東印度會社と同樣の處置を爲すの外なしとの見込にて計策せしにはあらずやと疑がはる。かの名高き商策の行はれしは左もあることながら、茲には自から其の取除けなかる可らず。支那人と印度人とは、異人種なり。熱烈なる太陽に照されて身躰脆弱たり、而も元來女性的にして從順なるかの印度人と、溫帶地方に生活して文明の樣々の試練に耐え得べき支那人とは、別人也。

◎李鴻章、日本を疑察す　平和主義の李鴻章も時としては激偏することあり、日本に對する時の如き尤も然り。日本が、西國の智識を容るゝことに汲々たる、痛苦して其の陸海軍を改良することに盡力する、西國の學校組織を輸入することに勉強する等の事實は、李鴻章が疑察恐猊して措かざる所也。日本人は何故に應化せざる可らざる乎、彼等は其祖先の如くなることを恥づる乎、其特色、其詩歌、其美術、其信仰、其歷史、其遠古よりの稗傳等を提さげて日本は何故日本として保存せざる乎は彼が屢ば疑問する所也。彼當に言はんとす、たとへば余輩何如にして、佛蘭西の衣服を着、佛蘭西の食を食らひ、佛蘭西の言語を語ることを忍ぶを得ん、然るに日本の如此きは何んぞやと。

日本歐化するは彼が輕侮する所也、彼は日本の歐化の弊風をのみ觀察せり、此は日本人の弱點なりと思惟せり。之に反し彼は屈撓せざる保守的の支那人なり、其の衣服より一箇のボタンすら取除かず、其の豚尾より一髮の毛すら拔くことなし。數百年來如此し、祖先如此し、故に万古亦如此あるべしと言ふに似たり。

李鴻章の如此き感觸は、日本の歐化を見て、該國を見下げしむるに至らしめたり。

故に臺灣征伐、琉球受領等につきては、緊要の疑問多くありて、尙ほ未定了の事として彼が心中不平の間だに放置されし耳。たゞ尤とも注意せしは、日本の陸軍にて、其擴張の最後の目的が何處にあるやは彼が夙に見込を付け居る所也。彼嘗わんとす、日本が戰かわんとするは、たゞ支那なるべし、されど何故に支那と戰わんとするか、抑も支那は毫も日本に對して意なきにあらずや、世界の最大國にとりては此の一小島國を何にかせん、吾等が既でに所有する所のものを支配する丈にて既に人力は盡んとす、吾等は侵略人民にあらざることを知らずや、左るに彼の陸海軍の擴張は何の爲めにするぞ、惟ふに唯一つの目的の外あらざるべし、即はち日本は日本の方よりして進んで侵略せんとするならん、ヨシ、此の侵略來らば支那は忽ち日本を一掃して地球の表面より沒去せしむべしと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼が勇憤の時は斯く思ふこともあるべし、然し乍ら之に拘はらず、平和の政畧を行ふことには毫も遺漏なし。彼はつとめて日本と好條約を保たんとする也。余は、此事に付きては親しく知る所あり、又日本の東京に於て之が爲に盡力すべきことを委頼せられたることあり。もし危急切迫すれば、つねに吾合衆國政府に委頼して日本と平和を保たんとせし也。

以下、榎本公使が彼と同意して平和に盡力せしこと及び伊藤大使が天津條約を停決せし事情など記したれど畧す。

既に編者が机上にあり僅かに割愛して後の號に廻したるは、

三日の旅　　牛尾生

なみだの記　　さし子

婦人化粧の巻　　美妙評

原忠順君を悼む

巖本善治

嗚呼、先輩原忠順君長逝せり。邦家大動し、萬機革新の潮潮に際して、茲に清廉硬骨の直士を失へり。貴族院中、公平にして隠健なる、獨立にして實力ある民黨の士を要すること彌よ切なるの日に於て、茲に忠亘赤誠の一議員を失なへり。今や道士、經濟を知らず、經濟家は大道を忘れやすく、滔々として偏理拜金の迂癖に陷いるもの多きの日に於て、茲に道德經濟の達士を失なへり、余は此人に接して初めて忠臣の活摸範を見、亦た此人の意氣に親しみて初めて完全したる古武士の情操を味わひたり。惟ふに世人維新前後に於ける舊鹿島藩内一大改革の狀態を考究し、更に佐賀藩が何如に多く一大潛勢力に負ふ所ありしやの事情を精察せば、愕然として驚き意外の歎美絶呼を爲すなるべし。茲に知人が起草したる翁の畧傳を掲げ、些さか其一斑を示すと云ふ。

原忠順君は舊鹿島藩の人なり少小より氣節を尙び擠登江戸に上りて昌平黌に入る其黌に在るや詞章記誦の學を屑とせず深く名節を重んじ獨り經濟の道を講じ常に王室の式微を悲み大義の明ならざるを嘆き夙に王政恢復の大志を抱けり之を以て其交遊する所は概れ慷慨氣節の士松本謙三郎、松林駒二郎、高杉晉作等皆君と手を握る業成り藩に歸るに及び當時本藩の有志者副島二郎、大木民平、江藤新平、古賀一平、島彈右衛門等と交驩往來し辛苦經營大に本藩勤王の氣風を激成せり文久三年佐賀藩主鍋島閑叟朝に建策する所あらんとす然れども病に因て自から朝する能はざるを以て支藩鹿島領主、鍋島直彬之に代て上京す君亦扈隨して入朝せり

明治元年二月鍋島直彬復た鍋島直大に代り北陸道先鋒の兵を督して京師に入朝す是より先き君日夜奔走し慷慨擊節頻りに時期の遷延すべからざるを論じ豪傑の士と相謀りて隠然爲す所あり是に於て鍋島直彬の手兵七百に將として其北征に隨從し將に日ならずして戰途に就んとす此時朝命あり直彬をして宗家鍋島直大に代り長崎澄戍を督せしむ蓋し宗家の請に出づるなり君憤慨悲憤百方北伐の軍に從はんことを請ふ聽れずして已むなく命を奉じ藩主に從て歸藩し遂に其志業を完成するの機を失せり君永く以て終生の遺憾と爲す

然れども慷慨の念報効の志禁じ難く翌明治二年鹿島藩の名を以て箱舘殘賊追討の命を請ふ蓋し君が熱心從事したる勤王の事業尠なしとせず然れども其跡多くは湮沒して顯はれず思ふに是れ君が支藩の士なるを以て是等一切の計畫常に間接に出づるの已むを得ざりしを以てなり然れども當時直彬と本藩有志者との間に在て專ら諸般の畫策に從事せしもの實に君ならずんばあらず

初め君の藩に歸るや其主鍋島直彬を翼けて大に藩力を養ひ以て他日王事に盡すの業を成せり後ち鹿島藩執政と爲り專ら意を經濟に注ぎ學校を改良し人才を養育し兵士を訓練し戎器を整備し治蹟著々見る可きあり維新の後鹿島藩大參事に擧げらるゝに及び益々力を藩政に盡し百度倶に擧る其の鹿島の小藩を以て維新の際既に英式三大隊の精兵を養ひたるが如き又廢藩置縣の時に及で一金の藩債なかりしが、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

如き其の平生の施置以て見る可きなり

明治五年舊主鍋島直彬に隨して米國に航し華盛頓府に在て其の政躰を講究す歸りて米政撮要の著あり

爾後左院正院等に奉職せしも遂に念を官途に斷ち自から官を罷めて郷里に歸休せり明治十二年琉球藩を廢して沖繩縣を置かるゝに當り君擧げられて之が書記官さ爲る當時沖繩の形勢たる只廢置處分を決行したるのみにして善後の策綏撫の法未だ定まらず滿島の士民は危惧亡國の思を爲し淸國に脫走して救護を哀請するあり徒黨を煽動して回復を謀議するあり或は暴力に藉りて總官を害せんさし或は山林に避けて縣治を沮まんさし甚しきに至ては舊藩吏等租稅の帳簿を隱匿し公租を私収し陰險詭譎跋扈跳梁縣の名ありて縣の實なく危機一髮兵力を以て之を鎭壓するにあらずんば殆んど收拾す可からざるに至れり事態此の如くなるに其氣候溽熱酷暑四時蚊蟵を撤すべからず加ふるに土人毫も不潔を厭はず屠餘の豚腸街頭に腐爛し糞尿道路に充つるを以て劇性虎列刺病俄に發し其勢猛烈死屍累々而して沖繩の醫師たる唯だ舊來葛天氏の遺法に因るのみにして且つ之れすら尙全島數十名に過ぎず本州醫の赴任せる者僅々兩三名なきにあらずさ雖ども日夜勞役忽ち奔命に疲れて復た立つ能はず況んや土人の本州醫を忌避する蛇蝎の如くなるをや是に於て病毒猖獗患者忽ち蔓延し數日にして每戶殆ど其襲來を蒙らざるものなく甚しきに至ては一家皆枕を駢べて見す〳〵滅絕するに至るものあり悲號の聲苦惱の叫晝夜耳を貫きて凄まじく其慘況實に名狀すべからず縣官死するもの亦十數名縣令鍋島直彬亦劇性の病毒に侵され九死に瀕して一生期し難きの危急に迫り暴徒天災到る處暴威を逞ふして縣廳は宛なから四面重圍の中に孤立するに異ならず

君此間に立ち決然身を擲て四方の難事に當り日夜淬勵食ふもの味を甘んぜず寢ぬる席を安んぜず百方籌策曾て動かざるの縣治機關を運轉せしむることに盡瘁し傍ら疫病の慘毒無辜の人民を鏖殺せんさする慘禍を防禦するに務め瘴烟毒霧の間に奔走して暫らくも休せず此の如きもの數旬以て舊藩吏及び士族輩の非違を探撿し遂に皆自ら悔悟謝罪を表するに至らしめ一縣の政治始めて其緖に就く是に於て有祿士族の處分無祿士族の扶助及び重稅苛法の改革より小學校の創立師範學校の設置醫術の奬勵製糖の保護等凡べて從來の慣習を斟酌して新制を施し茲に稍縣治の實を擧ぐるを得たり之れが爲め初め縣官を視る讐敵の如くなりし士族も今や其の公廉誠實を知り聖恩の優渥なるを感喜し朝廷復た南顧の憂なきに至れり萬一此際措置當を失ひ駕御法を失はゞ其害決して沖繩一縣に止まらず或は意外の國辱を招くに至りしやも未だ知る可からず而して幸にして事茲に至らず前述の如き好結果を得るに至りしもの朝廷恩威の然らしむる所なりさ雖も抑も亦君が至誠悃忠能く一身萬難の中に處したるに由らずんばあらず

明治十四年九月君沖繩縣大書記官を辭す時に朝廷君を擧げて太政官書記官に榮轉せしめんさ欲するの議あり君皆之を辭して復び郷里に歸る初め明治八年官を罷めて歸休するや專ら田園に從事し植物園を私設して諸般の種苗を栽培し以て殖產興業の首唱者さなり地方の公益を計れり是に於て復た養蠶社を設け郷人就產の源を開き銀行を立て士族家產保持の道を定め勤勉質實の習を誘導して獨立の精神を養はしめ協同一致の風を養成して自治の基礎を立てしめ尙ほ力を敎育に致し學校を擴張し子弟を誘掖せり而して是等地方公共の事に關して率先して私財を抛つもの前後數十回其効果や一小地方を以て早く旣に佐賀縣下に重きを爲し常に近邑隣郷の推す所さなれり

明治廿三年帝國議會開設の期に及び佐賀縣多額納稅者の互撰に當り九月二十九日貴族院議員に任ぜられ爾來第六議會に至るまで至誠以て其任務を盡し重要の議案出づるに及べは每に往々夜を徹して其利害を査覈し敢て或は苟且に付せず多額納稅議員中衆の推す所さなる今や不幸天齡を斯人に假さず嗚呼可惜矣夫

片々

◎**京濵間女學校連合**　京濵間に同主義の女學校多くあり乍ら交通連合することさ絕無の姿にて志士をして遺憾無限ならしめける。去年初めて女子夏季學校なるもの起りてより初めて其途開けたるが未だ事業共同の運ひに至らざりしに、本月十日東京靑年會館に於て催ふされたる日淸事件共同慈善市に於て亦初めて其事あり。而も今回の事たる非常の成功にて各校皆悅喜溢るゝが如し。

◎**園てる對マクリン**　園てる女が吾社の訪問者に對して談話したる中に、英國某

女の大に欺かれたり云々の言あり其筆記女學雜誌に出で彼地の人々が一覧するや甚しき激昂を惹起したり、事實は全く相違せる由なり。今、(Light Thrown on an Involved Subject)と題する小册子を見るに、巨細其實狀を辯正せり。吾人は次號に於て其一部分を譯載せんことを欲す。

◎前橋廢娼論者氣力　依然として不易なり。然るに、去る天長節の日、市長の催ふしにて臨江閣に戰勝祝會を開く節、當市一百七十餘人の藝妓を惣あげにする旨聞えしに、折柄同志中たゞ野條氏一人の外あらざりしが、同氏が勸告運動にて、趣構をつゝしみ大に節する所ありしよし。依て同氏は左の如き書面に短刀一口を添えて祝意を寄せしと聞く、

一筆致啓上候閣下の御斡旋にや去三日の祝會に付醜族の輩も臨江閣正門を忌憚して他處より這入り候は小生が希望の幾分を充しめ申候今春我皇銀婚祝式の時には大變化步一步進んで止まらずんば遂に我市民の理想は妓女の餘興を要せずして國家の慶事を祝し得るの度に達し可申確信仕候依而閣下の御勅勵を謝するの印として別品一口呈上仕候之は敢えて刺さんとして却て其益に服したる安倍の一子を學び候譯には無之願くは一揮市民の煩惱を快断されん爲め御笑留被成下候へば小生の幸榮不過之候頓首々々

廿七年十一月六日　草莽之一處生　野條愛助㊞

征治副市尹閣下

◎梅花女學校の此花　成瀨仁藏君大坂梅花女學校に來りてより校内勃然として生氣あり。此度び、其の器關報告として「この花」と題する月刊雜誌出でたり。其の第一開に成瀨君の告文中云へらく、

よしや吾軍北京を陷れ、清帝を擒にし、莫大の償金を徵し、新條約を締結するに至ればとて、尚は未だ吾國の戰ふべき戰爭は局を結べるに非ざるなり。吾吾國の戰爭は爾今愈々劇甚ならんとす。東洋に對しては其暗昧頑愚と戰ひ、之れが燈臺たり、先登たり、師範たるの任を盡し、西洋に對しては政略上又は商賈の戰をなし、其の貪慾心と壓倒力とに抵抗し、以て東洋の平和幸福を擔保し、自國に對しては益々奮つて國力を增進し、國光を四表に發揮し、單に東洋の中耳を握るのみならず、世界に於て第一等の國家たるを期せざるべからず。嗚呼劇なる哉吾國民の戰や、嗚呼大なる哉吾國民の責任や。借問す、吾敬愛する姉愛する姉妹等は何を以てか吾國民をして能く此の劇戰に堪へ、以て凱歌を奏し、彼の重大の責任を遂げしめんとするや。吾人は敢て云ふ、是れ眞正の教育に賴るの外途なしと。蓋し獨り眞正の教育のみ能く正義を踏んで恐れず、公道に步して屈せず、進取堅忍、以て文明諸國と先を爭ひ、一步も讓らざるの國民を養成するを得るなり、謂つべし、吾國が教育の完全を希ふや實に切なりと。

◎松田みち子の書信　去年米國婦人奬勵學資の候補に及第し現に米國に在學中の松田みち子女史は、日本委員に書信を致して曰く、

海外にありては隔靴の感なきにあらざれど日々の新聞紙上にて故國の近况はうかひ獨りにて滑稽文悲劇を演し居候勇壯なる日本兵の名聲は今誰人の口にも賞賛し居り候小女は早く平和の局の結ばれんことをのぞみ居候日本は既に一大劍舞の壯劇を世界に著はして其力量を示し候故次には殖產興業德義の上に於て同しく外邦人の膝を挫き度候日本は面白き有望の國にて御座候

この夏やすみホワイト山行の途次バッサー大學を大覽いたし候バッサー大學は御承知の如く當地女大學校のうち創立の時期を第一におくものにして煉瓦の大建物蔦にからまれてうるはしく理化學室、美術館、體操場、天文臺等壯觀と申すより外なく候美術館には希臘、羅馬の男神又女神の大肖像幾個となく羅列し又あるとあらゆる金石禽獸の參考品室をみたす有樣小女はなる程〳〵と思ひし外日本には女のためかくの如き學校あれかしと考へしのみ

日本有爲の方々のうちにも女子のため大學なんどは沙汰の限りなしと申され候はんが左樣の儀にては決して無之と存候むづかしき學問を修むると唯に智識のためのみにては無之これによりて經驗も忍耐も養はれ申し得べくわきまへてしかも謙遜なる婦人は社會の寶と存じ候高慢なる婦人は中學の人に多く空談者は新學の仲間に見うけ申候とに御座候學問ありとも高慢を少しにても氣取り候ときは其の人品格は全く消へ失せ候ように考へ候當校長ミス、スチーブンスの如きは最小女等の龜鑑とすべき御方かと存じ候博學に候得共謙遜に婦人らしき動靜一言一行小女はいふも呆れる程感じ申候もしも學校が學性の人をつくり高慢の仲間をつくり出し候事なればむしろかゝる校舍なきに如かず候得共若もかゝる學校日本にありとせば其責任は校長又は主任者の上にありて決してかゝる事が肝要なる婦人教育て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ふ問題を人の腦裡よりうばひ去るものにては無之候かと存じ候

今年は昨年の昨年の經驗を經し後だけありて學校にも人にも相なれ學事も少々容易に覺へ候新しき學科をふろく學ぶ生徒と始め申候時にはいつも紛雜して却て益なきように考へ候昨年中小女の學科は悉く如斯にて有之教場にていつも人後にたち候事人間らしからぬこゝちいたすものに〻御座候今年はかつて心算を定めて新しき學期を始め候て愉快に存候ドシ〳〵と勉強いたす積りに御座候

今年ブレンマー大學七八十名の入學者のうち一科の「カンデーション」もなく全く試驗を結了せしものは唯六名のみなりといへば該校入學試驗の難易は一了判斷し得べく候向後日本婦人米國留學候補の希望者は數學に最御注意の事は可然と存じ候渡米後は語學に時間を要し候事出來得べくば日本にて代數、幾何、三角術なども女學校規則上の名計りにては無之眞に全く修めおく方至極の得策に御座候

此頃は秋のはじめとて風涼しく日靜なるとき樺の樹や山毛欅樹の間に徘徊漫歩することは盡せぬ興味あるものに御座候森の中凡數十尺の樹梢に嘯くの外天地音なく青葉銀鉾をきらめかしてところ〴〵紅の紅葉をはさみ一面地上に淡婆たる影紋を投げうつす有樣何とも筆し難し心神忽ち飛んで主宰の前におのれをしらぶ天地は聲なくして眞に聲を有し候擱筆

米國ゼルマンタオンにて

十月六日認　　　　松田道

再版 **小公子** 巖本善治妻譯す◎表裝麗わしく寫眞入りの大冊子にて一冊定價廿八錢、郵税四錢なり。

願くは人の子をして此の小公子の如く愛らしからしめん。

解譯 **猫と鼠** 猫と鼠の戰ひに喩えて有益なる教をさとす文章流麗にして誦すべし話の面白味限りなし。

一小册子價五錢郵税二錢子供への遺物として最とも好し。

六版 **百人一首講義** 鈴木弘恭氏講述◎一册正價廿八錢郵送税四錢◎傳記講義手引入。

クリスマスは日本の正月なり百人一首の講義尤とも面白し。

信神孝父 **腓立比物語** 櫻井成明氏譯◎一册正價二十五錢郵送税四錢◎大本美裝堂々有雅趣。

嗚呼何等の熱信、何等の篤孝ぞや、讀んで泣かざる者なし。

以上出版及賣捌元　東京下六番町　女學雜誌社

明治女學校生徒募集

◎各級とも缺員有之候に付入學をゆるす、月謝金一圓廿錢

◎高等小學第三年卒業の學力ある者は無試驗入學をゆるす

◎普通科は四年即はち高等小學卒業後三年にて卒業のはづ

當期出校教授左の如し

巖本善治	星野愼之輔	石川角二郎
鈴木弘恭	八木彝辰	犬養銈之助
ミス、スコット	大和田建樹	小此木忠七郎
島崎春樹	塚本又喜	池四郎次郎
福迫龜太郎	戸川明三	塚本はま
齋藤音作	呉くみ子	納所辨二郎
神中糸	竹内梅子	矢田きく子
鈴木馨	吉住深山	五島千代槌子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	定價	郵稅
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可減	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

戲曲 **桂五郎** 阿波鳴門左衛門著 十錢 郵券二錢

高橋傳五郎 巖本善治編輯 五錢 郵券二錢

偉人物 山月子稿 同前

發行所 女學雜誌社

野生近々渡韓すべきやと被案御問合せの向不尠候處差當り右樣の事無之に付御承知被下度候但し近來多くは外出不在に付急用御申越の儀自然御速答致兼候段豫じめ御斷申置候

王子村下十條にて
巖本善治 敬白

吾社書店休業の事

表神保町に構えたる本社書店は此度休業致候に付今後書籍賣捌及び雜誌大御を左の書店に委賴す◎但し雜誌得意の注文及各地方よりの書籍の注文は直ちに本社に向け御申越あり度候

神田南神保町十五番地
文學界雜誌社書店

女學雜誌前號目錄

◎社說 大日本起てり○太淸の義人に告ぐ

◎隨感 美のおもて○風流の音○吾見に人生を憶ふ○戸内の罵聲○艱難のよろこび○情を讀むの學○人生些觀（愍下微笑）○塗耳錄（默吟生）

◎女學 東西女學比觀（道理は易し適用は難し）（ホームの區域東西相異の事）○女生徒散錄

◎評論 透谷集を讀む○德川光圀○紅葉の紫○民友社の日淸軍記○德川政敎考○日本學制論

◎爛熳 博物館を觀るの記（無光）○朝鮮宗教の將來（布川靜淵）○悲しむ人（白衣）○縱學行（朝菌生）○高橋傳五郎を憶ふ（川合信水）○小さき手帳（日本の一學生）○傳道者たりし以前の高橋傳五郎君○樹玉集（泡鳴子）○婦人化粧の卷（山田美妙評）○捕虜の護送を視る（無名子）

女學雜誌定價表

項目	内容
前金	壹冊 金拾錢　一年前金 金壹圓（無郵稅）
廣告料及無料廣告	一行一回（廿七字詰）前金十錢　同三回以上一割引　同六回以上二割引　○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半部增さ定む。
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京下六番町六番地 巖本善治

印刷人 東京青山北町五丁目卅一番地 堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY